

獣医師国家試験
出題基準
(令和7年度改正)

令和8年3月3日

獣医事審議会

留 意 事 項

1. 本出題基準は、獣医師国家試験の出題に際して準拠する項目として整理したものである。
2. 本出題基準は、卒前教育の全てを網羅したものではなく、また、それを拘束するものでもない。
3. 本出題基準は、以下の4つのカテゴリに編成されている。
 - 獣医療の基本的事項
 - 獣医学の基本的事項
 - 衛生学に関する事項
 - 獣医学の臨床的事項
4. 大・中・小項目については、おおむね次のような考え方で分類している。
 - 大項目…中項目を範ちゅう毎に総括する見出し的なものである。
 - 中項目…中心的な設問対象であり、標準的な教科書に記載されている程度の知識を要求する。
 - 小項目…より詳細な知識を要求する事項や重要な用語である。
5. 本出題基準は、令和8年度に実施する第78回獣医師国家試験から適用される。
6. 第78回以降の獣医師国家試験の出題内容と出題数は、別表のとおりである。
7. 必須問題については、
 - 『獣医療の基本的事項』（おおむね3割）
 - 『獣医学の基本的事項』、『衛生学に関する事項』、『獣医学の臨床的事項』のうち、獣医師として必ず備わっていなければならない事項及び動物又は公衆衛生に対して重大な影響を与える非常に重要な事項（おおむね7割）より出題するものとする。

8. その他の注意事項は、以下のとおりである。

(1) 各項目におけるカッコは、以下のルールにより使用している。

() : 省略しても意味又は分類の変わらない語句

< > : 直前の語句の言い換え又は説明

[] : < > の中に < > が存在する場合の大きな括り

《 》 : 対象となる動物種

【 】 : 補足説明

(2) 獣医学の臨床的事項においては、中項目又は小項目に掲げられた疾患・障害名に関する「病因、病原性、疫学、病理、病態生理、症状、検査、診断、治療、予防<防疫>、予後」について、標準的な学生用の教科書に記載されている程度の内容を出題範囲とする。

(3) 獣医学の臨床的事項においては、みつばち及び魚類を除く飼育動物（一般に人が飼育する動物をいう。以下同じ。）を出題の対象とする。

(別表) 獣医師国家試験の出題内容と出題数

	出題内容	出題数
必須問題	「獣医療の基本的事項」並びに「獣医学の基本的事項」、「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」のうち重要な事項	50問
学説A	「獣医療の基本的事項」及び「獣医学の基本的事項」	80問
学説B	「衛生学に関する事項」及び「獣医学の臨床的事項」	80問
実地C	原則として「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」について、獣医療現場で実際に起こり得る症例・事例に関する基本的かつ重要な事項	60問
実地D	原則として「衛生学に関する事項」、「獣医学の臨床的事項」について、獣医療現場で実際に起こり得る症例・事例に対する対処方法等の総合的な事項	60問

目 次

獣医療の基本的事項	1
I 獣医師の役割・倫理、動物福祉、法・制度	2
獣医学の基本的事項	6
I 構造と機能	7
II 生殖と行動	11
III 薬理作用と毒性、放射線作用	14
IV 病原体と寄生体	21
V 発症機序と病理・病態	24
VI 主要症候	28
VII 検査と診断	32
VIII 治療と処置	36
衛生学に関する事項	41
I 動物衛生と公衆衛生	42
II 動物の飼育・衛生管理	45
III 魚類の飼育・衛生管理	49
IV 食品衛生	52
V 人獣共通感染症	56
VI 環境衛生	59
獣医学の臨床的事項	63
I 栄養	64
II 感染症	65
III 中毒	73
IV 呼吸器系と胸腔・胸膜の疾患	75
V 循環器系の疾患	77
VI 消化器系と腹腔・腹膜の疾患	79
VII 泌尿器系の疾患	82
VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患	83
IX 運動器系の疾患	86
X 神経系の疾患	88
XI 感覚器系の疾患	90
XII 血液・免疫系の疾患	91
XIII 内分泌・代謝系の疾患	92
XIV 皮膚の疾患	94
XV 乳房・乳腺の疾患	95
XVI 新生子の疾患	96
XVII 行動の疾患	97

獣医療の基本的事項

獣医師の役割、獣医師としての業務を遂行するに際して必要な倫理・規範的知識、動物福祉並びに法的知識及びこれらに関連する行政の仕組みについて、獣医師を取り巻く社会情勢の変化、獣医療を取り巻く社会的問題にも配慮した上で体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 獣医師の役割・倫理、 動物福祉、法・制度	----- 獣医学概論、獣医倫理・動物福祉学、 獣医事法規

I 獣医師の役割・倫理、動物福祉、法・制度

大項目	中項目	小項目
1. 獣医師の役割	<p>A 獣医倫理</p> <p>B 飼育動物の所有者との関係</p> <p>C 動物福祉</p>	<p>a 獣医師としての責務</p> <p>b 社会的責任</p> <p>c 法の遵守</p> <p>a インフォームドコンセント</p> <p>b 情報開示</p> <p>c 個人情報の保護</p> <p>d 飼い主の意向の尊重</p> <p>e 飼い主の心理</p> <p>a 動物福祉〈アニマルウェルフェア〉</p> <p>b 動物愛護と虐待の防止</p> <p>c 動物の権利</p> <p>d 3Rの原則</p> <p>e 5つの自由</p> <p>f 安楽死</p>
2. 診療情報と諸証明	<p>A 診療簿、検案簿、家畜人工授精簿</p> <p>B 診療に関する諸記録</p>	<p>a 診療簿・検案簿・家畜人工授精簿の管理と保存</p> <p>b 診療簿・検案簿・家畜人工授精簿の内容</p> <p>c 診療情報の開示</p> <p>a 処方箋、指示書</p> <p>b 検査所見記録</p> <p>c 手術記録</p> <p>d 画像記録</p> <p>e 診断書</p> <p>f 出生証明書</p> <p>g 死産証明書</p> <p>h 検案書</p> <p>i 人工授精証明書</p> <p>j 受精卵〈胚〉移植証明書</p> <p>k 体内受精卵採取証明書</p> <p>l 体外受精卵生産証明書</p>
3. 獣医療の質と安全の確保	<p>A 獣医療の質の確保</p> <p>B 獣医療事故の防止</p> <p>C 医薬品・医療機器の副作用と不具合</p>	<p>a 科学的根拠に基づく獣医療</p> <p>b 獣医療提供体制</p> <p>c 遠隔診療</p> <p>a 獣医療過誤と獣医療事故〈説明義務、注意義務、過失（予見性、回避義務）〉</p> <p>b 電離放射線障害防止規則医薬品管理</p> <p>c 医療廃棄物処理</p> <p>a 有害事象と副作用・不具合</p> <p>b 副作用への対応</p>
4. 社会と獣医療	<p>A 統計分析</p> <p>B 獣医療と社会との調和</p>	<p>a 家畜衛生関係統計</p> <p>b 公衆衛生関係統計</p> <p>a 産業動物獣医療と家畜共済制度</p> <p>b 遺伝子組換え技術</p> <p>c 学校飼育動物</p> <p>d 補助犬</p> <p>e 動物介在教育、動物介在療法、動物介在活動</p> <p>f 野生動物の保全と管理</p> <p>g 動物園水族館の役割</p> <p>h 伴侶動物の飼育実態</p> <p>i 獣医師が組織する団体</p> <p>j ワンヘルス</p>

大項目	中項目	小項目
	C 獣医師の職域	a 伴侶動物獣医師 b 産業動物獣医師 c 公務員獣医師〈農林畜産・公衆衛生・動物愛護〉 d 実験動物の獣医師 e 展示動物・野生動物に関する獣医師 f 教育・研究開発に関する獣医師
5. 行政機関	A 家畜衛生組織 B 公衆衛生組織 C 環境関係 D 水産関係 E 国際機関	a 農林水産省【動物検疫所、動物医薬品検査所等を含む。】 b 農研機構動物衛生研究部門 c 地方自治体【家畜保健衛生所を含む。】 a 厚生労働省【検疫所、国立医薬品食品衛生研究所を含む。】 b 特殊法人国立健康危機管理研究機構 c 内閣府【食品安全委員会、消費者庁等】 d 地方自治体【保健所、動物愛護管理センター等を含む。】 e 環境省 a 環境省 a 農林水産省 a WHO b WOH c FAO d WTO e OECD f コーデックス委員会 g JECFA h JMPR i VICH
6. 獣医行政法規	A 獣医事・薬事関連法規 B 家畜衛生行政関連法規 C 公衆衛生行政関連法規	a 獣医師法 b 獣医療法 c 愛玩動物看護師法 d 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律〈薬機法〉 e 毒物及び劇物取締法 f 麻薬及び向精神薬取締法 g 覚醒剤取締法 a 家畜伝染病予防法 b 家畜保健衛生所法 c 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律 d 牛の個体識別のための情報の管理及び伝達に関する特別措置法 e 家畜改良増殖法 f 牛海綿状脳症対策特別措置法 g 家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律 a 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 b 新型インフルエンザ等対策特別措置法 c 狂犬病予防法 d 検疫法 e と畜場法 f 化製場等に関する法律 g 食品衛生法

大項目	中項目	小項目
	D 環境行政関連法規	h 地域保健法 i 食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律 j 食品安全基本法 k 食品表示法 l 農薬取締法 a 動物の愛護及び管理に関する法律 b 廃棄物の処理及び清掃に関する法律 c 水道法 d 下水道法 e 水質汚濁防止法 f 大気汚染防止法 g 自動車から排出される窒素酸化物及び粒子状物質の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法 h 特定特殊自動車排出ガスの規制等に関する法律 i 農用地の土壌の汚染防止等に関する法律 j 土壌汚染対策法 k ダイオキシン類対策特別措置法 l 騒音規制法 m 振動規制法 n 悪臭防止法 o 愛がん動物用飼料の安全性の確保に関する法律 p 環境基本法 q 生物多様性基本法 r 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律 s 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律 t 鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律 u 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 v 銃砲刀剣類所持等取締法 w 循環型社会形成推進基本法 x 資源有効利用促進法 y 容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律 z 特定家庭用機器再商品化法 aa 建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律 ab 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律 ac 使用済自動車の再資源化に関する法律 ad 使用済小型電子機器等の再資源化の促進に関する法律 ae 化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律 af 特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律 ag 地球温暖化対策の推進に関する法律 ah 特定物質等の規制等によるオゾン層保護に関する法律

大項目	中項目	小項目
	E 水産関連法規	ai フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律 aj 海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律 a 持続的養殖生産確保法 b 水産資源保護法
7. 獣医史	A 動物の家畜化と獣医療の発祥 B 近代獣医療の発達 C 日本の獣医療の発達	

獣医学の基本的事項

獣医師としての職能を身につける上で、必要不可欠な基礎となる獣医学の分野を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 構造と機能	解剖学、組織学、発生学、生理学、生化学、免疫学、臨床繁殖学
II 生殖と行動	生理学、動物遺伝育種学、動物行動学、臨床繁殖学
III 薬理作用と毒性、放射線作用	薬理学、毒性学、実験動物学
IV 病原体と寄生体	微生物学、家禽疾病学、寄生虫病学
V 発症機序と病理・病態	病理学、微生物学、家禽疾病学、動物感染症学、寄生虫病学、内科学総論、外科学総論
VI 主要症候	内科学総論、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学
VII 検査と診断	放射線生物学、病理学、免疫学、微生物学、家禽疾病学、魚病学、動物感染症学、寄生虫病学、内科学総論、臨床病理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、画像診断学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学
VIII 治療と処置	内科学総論、臨床薬理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、臨床栄養学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、手術学総論、麻酔学、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学

I 構造と機能

大項目	中項目	小項目
1. 生体の基本構造と機能	A 細胞の構造と機能	a 核 b 細胞質 c 細胞小器官 d 細胞膜 e 細胞骨格 f 有糸分裂（細胞周期）と減数分裂 g 細胞死 h 細胞間結合
	B 組織の構造と機能	a 上皮組織 b 支持組織（結合組織、軟骨組織、骨組織） c 筋組織 d 神経組織 e 着床と原腸胚形成 f 胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉） g 間葉組織
	C 生体構成物質の構造と特性	a 糖質 b 脂質 c タンパク質、アミノ酸 d 核酸、ヌクレオチド e 無機質、ビタミン
	D 内部環境とホメオスタシス	a 体液の組成 b 体液とその区分 c 体液のpH（酸塩基平衡）と浸透圧 d 体液量の調節
	E 細胞膜を介する物質輸送	a 細胞膜の性質 b 担体輸送〔能動輸送、促通（促進）拡散〕 c トランスポーター、イオンチャネル d 膜動輸送（サイトーシス）
	F 細胞の興奮発生と興奮伝導	a 静止膜電位と Na^+ - K^+ ポンプ b 活動電位と電位依存性イオンチャネル c 跳躍伝導
	G 情報伝達	a 細胞間情報伝達（ホルモン、神経伝達物質、細胞増殖因子、サイトカイン、オートコイド） b 受容体（細胞膜受容体、細胞質内受容体、核内受容体） c 細胞内情報伝達系（セカンドメッセンジャー、リン酸化反応）
	H 遺伝情報の発現とタンパク質合成	a 遺伝情報とその発現〔DNAの合成、遺伝子の発現（転写）、遺伝子とその異常〕 b タンパク質の合成（翻訳、局在）
	I 物質代謝	a 糖質の代謝〔解糖とクエン酸サイクル（回路）、血糖調節、糖新生、グリコーゲン代謝、ペントースリン酸回路（経路）〕 b 脂質の代謝（合成と分解、輸送と蓄積、ケトン体、コレステロール） c アミノ酸の代謝（分解と合成） d 核酸代謝（合成と分解） e 酵素、補酵素、補欠分子族 f 臓器特異性 g 臓器相関
	J 生体エネルギーの産生	a エネルギー代謝（自由エネルギー、ATP、生体酸化）

大項目	中項目	小項目
	K 体温調節	<ul style="list-style-type: none"> b 呼吸鎖と酸化的リン酸化 c クエン酸サイクル〈回路〉 d エネルギー代謝の測定〈呼吸商、基礎代謝量〉 e 発酵 a 熱産生と熱放散 b 体温〈内温動物、外温動物、核心温度、外殻温度〉 c 体温調節機構と異常体温
2. 呼吸器系	<ul style="list-style-type: none"> A 呼吸器系の発生 B 呼吸器系の構造と機能 C 胸腔・胸膜の構造と機能 	<ul style="list-style-type: none"> a 気管・気管支・肺の発生 a 呼吸器〈外鼻、鼻腔、副鼻腔、喉頭、気管、気管支、肺〉 b 鶏の呼吸器 c 肺におけるガス交換と肺循環 d 血液のガス運搬とpH調節作用 e 呼吸運動（呼吸筋）と呼吸調節 f 呼吸器系の防御機構 g 気道反射 a 心膜と胸膜 b 心膜腔と胸膜腔 c 縦隔 d 呼吸運動 e コンプライアンスと胸腔
3. 循環器系	<ul style="list-style-type: none"> A 循環器系の発生 B 血管系の構造と機能 C リンパ系の構造と機能 	<ul style="list-style-type: none"> a 心臓・動脈系・静脈系の発生 a 血管〈動脈系、静脈系、毛細血管、吻合〉 b 心臓 c 鶏の心臓・血管系 d 心臓の刺激伝導系と自動能 e 心臓の電気的活動 心周期 f 循環動態に係る因子 g 神経・体液性因子による調節 h 循環力学と血圧 i 特殊部位の循環 j 微小循環 a リンパ管〈乳び槽、胸管〉 b リンパ節〈血リンパ節〉 c 粘膜付属リンパ組織〈孤立リンパ小節〉 d リンパ中心
4. 消化器系	<ul style="list-style-type: none"> A 消化器系の発生 B 消化器系の構造と機能 C 腹腔・腹膜の構造と機能 	<ul style="list-style-type: none"> a 口蓋・消化管・消化腺の発生 a 口〈口腔、歯、舌、口唇、頬、口蓋〉 b 消化管〈咽頭、食道、胃、小腸、大腸、肛門管、肛門〉 c 消化腺〈口腔腺、肝臓・胆嚢、膵臓〉 d 反芻動物の胃 e 鶏の消化器 f 消化管機能の調節 g 胃腸管の運動 h 唾液・胃液・膵液・胆汁・腸液の分泌 i 栄養物の消化と吸収 j 反芻動物の消化と吸収 k 栄養素の利用 l 消化管ホルモン a 腸間膜

大項目	中項目	小項目
		b 大網、小網 c 網囊 d 間膜
5. 泌尿器系	A 泌尿器系の発生 B 泌尿器系の構造と機能	a 腎臓・尿管・膀胱の発生 a 腎臓、尿管、膀胱、尿道 b 鶏の泌尿器 c 糸球体濾過 d 尿細管・集合管の機能 e 尿の濃縮と希釈 f クリアランス g 腎機能の調節 h 酸塩基平衡 i 腎臓の内分泌機能
6. 生殖器系	A 生殖器系の発生 B 雄性生殖器系の構造と機能 C 雌性生殖器系の構造と機能	a 雄性生殖器・雌性生殖器の発生 a 雄性生殖器〈精巣、精巣上体、精管、精索、副生殖腺、陰茎、陰囊〉 b 鶏の雄性生殖器 a 雌性生殖器〈卵巣、卵巣嚢、卵管、子宮、膺、外生殖器〉 b 胎盤 c 鶏の雌性生殖器
7. 運動器系	A 運動器系の発生 B 骨の構造と機能 C 筋の構造と機能 D 関節の構造と機能 E 腱、靭帯の構造と機能	a 骨・軟骨・筋の発生 a 緻密骨〈皮質骨〉、海綿骨、骨髄 b 骨格〈頭蓋、脊柱、胸郭、前・後肢骨、骨盤〉 c 鶏の骨格 d 骨代謝 a 骨格筋〈頭頸部、体幹、前・後肢〉 b 心筋 c 平滑筋 d 筋の収縮機構 e 筋紡錘、腱受容器 f 神経筋伝達 g 筋の代謝と疲労 a 軟骨の構造と代謝 b 関節〈滑膜・縫合〉
8. 神経系	A 神経系の発生 B 中枢神経・末梢神経の構造と機能	a 中枢神経系・末梢神経系の発生 b 神経堤細胞 a 脊髄 b 脳〈大脳、間脳、中脳、小脳、橋、延髄〉 c 脳室、脊髄中心管 d 体性神経系〈脳神経、脊髄神経〉 e 自律神経系〈交感神経、副交感神経〉 f ニューロン、グリア細胞 g シナプス、神経伝達物質 h 運動系伝導路と運動制御系 i 感覚系伝導路 j 反射弓 k 血液脳関門と脳脊髄液 l 情動と本能行動
9. 感覚器系	A 感覚器系の発生 B 感覚器系の構造と機能	a 視覚器・聴覚器・平衡器の発生 a 視覚器〈網膜〉 b 聴覚器〈コルチ器〉

大項目	中項目	小項目
		c 平衡器〈耳石器・三半規管〉 d 嗅覚器〈嗅粘膜〉 e 味覚器〈味蕾〉 f 特殊感覚〈視覚、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚〉 g 体性感覚
10. 血液、造血器系	A 血液・造血器系の発生 B 血液・造血器の構造と機能	a 造血幹細胞と血球分化 b リンパ球の発生〈遺伝子再構成〉 a 骨髄、リンパ組織、脾臓 b 血液細胞〈赤血球、白血球、血小板〉 c 凝固・線溶系 d 血漿タンパク質
11. 内分泌系	A 内分泌系の発生 B 内分泌系の構造と機能	a 下垂体・甲状腺・上皮小体・胸腺・副腎の発生 a 視床下部、下垂体、松果体 b 甲状腺、上皮小体、副腎、膵島、精巣、卵巣 c 腎臓、肝臓、胸腺、心臓、消化管、胎盤 d ホルモンの種類 e ホルモンの合成・分泌とその調節 f ホルモンの作用機序 g 成長と代謝 h ストレス反応
12. 外皮	A 外皮の発生 B 外皮の構造と機能	a 皮膚とその付属器の発生 a 皮膚 b 付属器〈角質器、皮膚腺、乳腺、変形腺〉
13. 免疫	A 免疫系の構造と機能	a 免疫器官〈骨髄、胸腺、リンパ節、ファブリティウス嚢、脾臓、扁桃、パイエル板〉 b 免疫担当細胞〔リンパ球〈T細胞、B細胞、NK細胞〉、抗原提示細胞〈マクロファージ、樹状細胞、B細胞〉〕 c 免疫グロブリン d 補体 e サイトカイン f 自然免疫と獲得免疫 g 免疫応答とその調節 h 抗原の認識〈MHC拘束性〉 i 免疫寛容と自己免疫

II 生殖と行動

大項目	中項目	小項目
1. 生殖子の形成と成熟	A 卵子の形成と卵胞の発育 B 卵子の成熟と排卵 C 精子の形成と成熟 D 精子の形態と機能 E 射精	
2. 性成熟と生殖周期	A 雄・雌の性成熟 B 生殖周期 C 発情周期（性周期） D 発情周期中の生殖器の変化 E 発情周期中のホルモンの変化 F 発情期の性行動（雄） G 発情期の性行動（雌） H 排卵の機序 I 交配適期	a 生殖器の変化 b 春機発動、性成熟期 c 繁殖供用適齢期 a 完全生殖周期 b 不完全生殖周期 c 季節周期（周年繁殖、季節繁殖） d 日周期 a 発情周期、月経周期、卵巢周期 b 完全発情周期、不完全発情周期 c 単発情、多発情 a 卵巢の変化（卵胞発育・成熟、排卵、黄体発育・退行、卵胞ウエーブ） b 副生殖器の変化 a 黄体退行からLHサージまで b LHサージから黄体退行まで a フレーメン b マウンティング a マウンティング b スタンディング c 歩行数増加 a 自然排卵 b 交尾排卵
3. 受精と着床	A 受精の条件 B 受精の過程 C 胚の発生と発育 D 着床	a 精子の受精能獲得 b 先体反応 c 多精拒否 a 胚の子宮内分布 b 着床の形式 c 着床過程
4. 妊娠と胎子発育	A 胎子 B 胎水、胎膜、胎子付属物 C 胎盤 D 妊娠期間 E 単胎動物における多胎妊娠 F 多胎動物の同期・異期複胎妊娠 G 妊娠とホルモン H 母体の妊娠認識 I 妊娠時における母体の変化	

大項目	中項目	小項目
5. 分娩と新生子	A 分娩発来の機序 B 分娩徴候 C 分娩の経過 D 分娩後の生殖器の修復と発情回帰 E 泌乳 F 新生子の生理	a 産道 b 産出期 a 分娩経過（開口期、産出期、後産期） a 子宮の修復 b 分娩後の発情回帰
6. 遺伝学の基礎	A 遺伝子と表現型 B 染色体とゲノム	a メンデル遺伝 b 顕性<優性>、潜性<劣性>、不完全顕性<優性> c 伴性遺伝、限性遺伝、母性遺伝 d エピジェネティクス a 減数分裂、配偶子形成 b 核型、半数体 c 倍数体と異数性、染色体異常 d 連鎖と組換え、交差<交叉、乗換え> e DNAの複製、遺伝子発現 f 変異<突然変異>
7. 遺伝学の応用	A 遺伝的改良 B 形質の遺伝 C 遺伝学的解析 D 動物の遺伝性疾患	a 集団遺伝学 b 遺伝的パラメータ c 選抜 d 育種価 e 家畜の起源と品種 f 遺伝的多様性 a 生産形質の遺伝 b 多因子支配の形質 c 血液型の遺伝 d 毛色の遺伝 e 免疫遺伝学 a 多型マーカー、個体識別 b 家系解析、連鎖解析 c QTL解析 a 臨床、病態、原因 b 遺伝様式 c 遺伝子頻度 d 遺伝子診断 e 遺伝性疾患への対処
8. 行動学総論	A 行動学の基本概念 B 行動の進化 C 行動の発達 D 行動の周期性 E 行動の動機づけと情動系 F 行動に影響する生体物質	a 行動学研究の4分野（究極要因、至近要因） b 行動生態学（適応度、包括適応度、血縁淘汰） a 自然選択説、人為的選択 b 家畜化と行動変化 a 早成性動物と晩成性動物 b 発育ステージ（新生子期、移行期、社会化期、若年期） c 発達に影響する要因 a 日周リズム b 年周リズム c その他の周期性 a 行動の動機づけ b 大脳辺縁系と情動行動の発現 c 大脳新皮質による情動の制御 a 神経伝達物質・神経修飾物質と行動 b ホルモンと行動

大項目	中項目	小項目
	G 行動変容と学習理論	c 行動に影響する主な化学物質 a 刺激と反応の関係 b 古典的条件づけとオペラント条件づけ（強化、消去） c 高度な学習行動
9. 行動学各論	A コミュニケーション行動 B 生殖行動 C 社会行動 D 維持行動	a 信号の重複と儀式化 b 視覚・聴覚・嗅覚を用いたコミュニケーション行動 a 生殖戦略 b 性行動 c 育子行動 a 群れの社会構造 b 敵対的行動 c 親和的行動 a 摂食行動 b 排泄行動 c 身づくろい行動

III 薬理作用と毒性、放射線作用

大項目	中項目	小項目
1. 薬理学と毒性学	A 薬理学 B 毒性学	
2. 薬理作用と毒性の基本概念	A 薬理作用・毒性の種類 B 主作用と副作用	
3. 化学物質〈医薬品、毒性物質〉の体内動態	A 化学物質の生体内侵入〈投与、曝露〉経路 B 体内動態と環境中動態 C 薬力学 D 膜透過と吸収 E 分布 F 代謝〈生体内変化〉 G 代謝と毒性発現に影響する因子 H 排泄 I 薬物動態	a 薬物投与 b 意図的曝露 c 職業的曝露 d 環境曝露 a 生体膜透過メカニズム〔単純〈受動〉拡散、濾過、担体輸送〔能動輸送、促進〈促進〉拡散〕、酸解離指数 (pKa)、脂溶性〕 a 血漿タンパク質結合率 (薬物結合率) b 組織分布 c 蓄積 (生体内蓄積) d 再分布 (薬物再分布) a 酸化 b 還元 c 加水分解 d 抱合 e ミクロソーム及び非ミクロソーム酵素系 f シトクロームP450酵素系 g 代謝酵素誘導及び阻害 h 解毒及び代謝的活性化 a 遺伝的要因 (遺伝的多様性) b 動物種差 c 生理的因子 d 環境因子 e 代謝酵素の誘導・阻害及び薬物相互作用 a 尿細管での分泌及び再吸収 b 腸肝循環 c 乳汁への移行 a コンパートメントモデル b 半減期 ($t_{1/2}$) c 分布容積 (Vd) d 薬物クリアランス e 血中濃度-時間曲線下面積 (AUC) f 生物学的利用率 (バイオアベイラビリティ) g 初回通過効果 h 治療薬物モニタリング (TDM)
4. 化学物質の生体への影響	A 薬物・毒性物質の種類と薬効 B 化学物質に対する生体防御機構	a 作用機序及び使用目的による分類 b 化学構造による分類 a バリアシステム (血液脳関門、血液胎盤関門、血液精巣関門) b 代謝酵素の誘導 c 抗酸化酵素の誘導 d 排出機構 (P-糖タンパク質) e メタロチオネイン
5. 薬理作用・毒性とその評価	A 薬理作用・毒性の基本形式	a 興奮作用及び抑制作用 b 直接作用及び間接作用 c 局所作用及び全身作用

大項目	中項目	小項目
	<p>B 薬理作用・毒性の発現機構</p> <p>C 薬理作用・毒性を規定する要因</p> <p>D 薬効評価</p> <p>E 毒性評価</p>	<p>d 選択毒性</p> <p>e 遅延性毒性〈遅発性毒性〉</p> <p>f 蓄積的影響</p> <p>g 毒性の可逆性（または回復性）</p> <p>h 耐性及び依存性</p> <p>a 受容体</p> <p>b 細胞内シグナル伝達系</p> <p>c GTP結合タンパク質〈Gタンパク質〉</p> <p>d セカンドメッセンジャー</p> <p>e イオンチャネル</p> <p>f 受容体理論〈親和性、内活性、pA₂、pD₂〉</p> <p>g 遺伝子</p> <p>a 用量〔対数用量反応曲線、50%有効用量〈ED₅₀〉、最少肺胞内濃度〈MAC〉、最少発育阻止濃度〈MIC〉、最少殺菌濃度〈MBC〉、50%致死量〈LD₅₀〉、50%致死濃度〈LC₅₀〉、50%影響濃度〈ED₅₀〉治療係数〈安全域〉〕</p> <p>b 投与方法〔経口投与、注射投与〈血管内・外〉〕</p> <p>c 薬物感受性〈種差、系統差、性差、年齢差、個体差〉</p> <p>d 薬物耐性</p> <p>e 薬物相互作用〈協力作用、拮抗作用、競合型拮抗、非競合型拮抗〉</p> <p>f 無作用量〈NOEL〉及び無毒性量〈NOAEL〉</p> <p>g ADI（一日摂取許容量）、TDI（耐容一日摂取量）</p> <p>a 非臨床試験</p> <p>b 臨床試験〈第Ⅰ相～第Ⅳ相〉</p> <p>c 生物学的試験法</p> <p>d 二重盲検法</p> <p>a GLP</p> <p>b 信頼性の確認と保証</p> <p>c 毒性評価試験系</p> <p>d 対照群</p> <p>e リスク評価</p> <p>f 一般毒性試験（急性、亜急性、慢性毒性試験）</p> <p>g 安全性薬理試験</p> <p>h 遺伝毒性試験</p> <p>i 発がん性試験</p> <p>j 生殖発生毒性試験</p> <p>k 吸入毒性試験</p> <p>l 経皮毒性試験</p> <p>m その他の特殊毒性試験</p>
6. 環境毒性と環境毒性評価法	<p>A 化学物質の環境中動態</p> <p>B バイオアッセイ</p> <p>C 環境汚染物質</p> <p>D 紫外線、放射線</p>	<p>a 大気、水、土壌中での動態</p> <p>a 指標生物</p> <p>b 生態毒性試験</p> <p>c 生物濃縮試験</p> <p>d 魚類毒性試験</p> <p>e TLm〈Median tolerance limit〉</p> <p>f log Pow（オクタノール/水分配係数の対数）</p>

大項目	中項目	小項目
7. リスクアナリシス	A リスク評価 (リスクアセスメント) B リスク管理 (リスクマネジメント) C リスクコミュニケーション	
8. 動物実験法	A 動物実験のデザイン B 動物実験技術 C モデル動物 D 動物実験の微生物コントロール	a 動物実験の意義 b 実験動物の選択 c 実験動物の福祉 d 動物実験計画 e 統計分析による動物実験成績の評価 f 動物実験成績の外挿 a ハンドリングと保定法 b 個体識別法 c 投与方法 d 剖検・試料採取法 e 麻酔法・安楽死法 a 生物学的モデル動物と疾患モデル動物 b 疾患モデル動物の分類 c 主な疾患モデル動物 a 微生物コントロールの意義 b 微生物コントロールの原理と方法 c 微生物コントロールからみた実験動物の区分
9. 末梢神経系に対する作用	A 局所麻酔薬 B コリン作動薬及び抗コリン作動薬 C 神経筋接合部遮断薬 (筋弛緩薬) D 自律神経節作用薬 E コリンエステラーゼ阻害薬 F アドレナリン作動薬及び拮抗薬 G 末梢神経毒性物質	a コリン誘導体 b アルカロイド類 c ムスカリン受容体遮断薬 a 競合型遮断 b 脱分極遮断薬 a 神経節興奮薬 b 神経節遮断薬 a カーバメイト化合物 b 有機リン化合物 c 再活性化薬 a カテコールアミン類 b その他の作動薬 c α 受容体遮断薬 d β 受容体遮断薬 e アドレナリン作動性ニューロン遮断薬 a キノホルム b 有機リン化合物 (遅発性神経毒性)
10. 中枢神経系に対する作用	A 全身麻酔薬 B トランキライザー、鎮静薬 C 鎮痛薬 D 抗てんかん発作薬 E 向精神薬 F 中枢神経興奮薬 G 中枢神経毒性物質	a 吸入麻酔薬 b 注射用麻酔薬 a フェノチアジン系 b ブチロフェノン系 c ベンゾジアゼピン系 d $\alpha 2$ アドレナリン受容体作動薬 a オピオイド b オピオイド拮抗薬 c 解熱性鎮痛薬 (非ステロイド系抗炎症薬) a 問題行動治療薬

大項目	中項目	小項目
11. オータコイド	A ヒスタミンとその拮抗薬 B 5-HT〈セロトニン〉とその拮抗薬 C レニン-アンジオテンシン系とその阻害薬 D ブラジキニン E アラキドン酸代謝産物 F 一酸化窒素 G サイトカイン類	a H1受容体拮抗薬 b H2受容体拮抗薬 a 受容体拮抗薬 b 再取り込み阻害薬 a アンジオテンシン変換酵素阻害薬 b アンジオテンシン受容体拮抗薬 a プロスタグランジン類 b ロイコトリエン類
12. 抗炎症薬	A 非ステロイド系抗炎症薬 B ステロイド系抗炎症薬	
13. 循環・呼吸系に対する作用	A 抗心不全薬 B 抗不整脈薬 C 血管拡張薬 D 呼吸作用薬 E 循環器毒性物質 F 呼吸器毒性物質	a 強心薬〈強心配糖体、カテコールアミン類、ホスホジエステラーゼ阻害薬〉 b 心臓負荷軽減薬〈前負荷除去・後負荷除去薬〉 c レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系阻害薬 a 降圧剤 b 抗狭心症薬 a 呼吸興奮薬 b 鎮咳薬 c 気管支拡張薬 a アルコール b 重金属化合物 c アントラサイクリン系 d アconiチン a パラコート b アスベスト c シスプラチン
14. 血液に対する作用	A 血液凝固促進薬 B 抗プラスミン薬 C 血液凝固抑制薬 D 試験管内凝固防止薬 E 血栓溶解薬 F 抗貧血薬 G 血液毒性物質	
15. 塩類代謝・腎機能に対する作用	A 塩類代謝作用薬 B 利尿薬 C 尿崩症治療薬 D 腎毒性物質	a 酸性化薬 b 塩基性化薬 c 輸液製剤 a 浸透圧性利尿薬 b ループ利尿薬 c サイアザイド系利尿薬 d カリウム保持性利尿薬 e 炭酸脱水酵素阻害薬〈緑内障治療薬〉 a 非ステロイド系抗炎症薬 b アミノグリコシド系抗生物質 c 重金属化合物 d エチレングリコール e オクラトキシンA

大項目	中項目	小項目
16. 消化器機能に対する作用	A 催吐薬 B 制吐薬 C 抗潰瘍薬 D 下剤〈瀉下薬〉 E 抗下痢薬〈止瀉薬〉 F 鎮痙薬 G 胃腸機能調整薬 H 消化器毒性物質	a 胃酸分泌抑制薬 b 粘膜保護薬
17. 内分泌機能に対する作用【臓器に作用する物質を含む。】	A 副腎皮質ホルモン B 甲状腺機能障害治療薬 C 糖尿病治療薬 D 繁殖に関する治療薬 E ビタミン F 性ホルモン G 内分泌毒性物質	a 視床下部ホルモン剤 b 性腺刺激ホルモン剤〈下垂体性、胎盤性〉 c 性ホルモン剤 d オキシトシン剤 e プロスタグランジン剤 a 内分泌攪乱物質
18. その他の臓器に対する作用	A 肝機能毒性物質 B 骨・軟骨組織毒性物質 C 皮膚毒性の種類 D 遺伝毒性物質 E 生殖発生毒性物質 F 発癌性物質 G 視覚毒性物質 H 聴覚毒性物質	a 四塩化炭素 b アフラトキシン類 c アセトアミノフェン a 刺激性皮膚炎 b アレルギー性皮膚炎 c 光毒性・光アレルギー性皮膚炎 d 接触性皮膚炎（蕁麻疹型） a DNA損傷及び修復 b 変異原性 a 雄性生殖毒性 b 雌性生殖毒性 c 発生毒性 a イニシエーター b プロモーター c 直接発がん物質 d 間接発がん物質〈発がん前駆物質〉
19. 免疫機能に対する作用	A 免疫抑制薬 B 免疫毒性物質	a PCB及びダイオキシン類 b 抗悪性腫瘍薬
20. 消毒薬の作用	A 四級アンモニウム塩〈陽イオン界面活性剤〉 B アルコール類 C ハロゲン化合物 D フェノール類 E 酸化薬 F アルキル化薬 G その他	
21. 化学療法薬、抗真菌薬の作用	A 抗菌薬	a サルファ薬及びその協力物質 b キノロン系 c ニトロフラン誘導体 d βラクタム系

大項目	中項目	小項目
	B 抗ウイルス薬 C 抗悪性腫瘍薬	e アミノグリコシド系 f クロラムフェニコール系 g マクロライド系 h テトラサイクリン系 i ペプチド系 j 抗真菌薬 a アルキル化薬 b 代謝拮抗薬 c 抗腫瘍抗生物質 d 植物アルカロイド薬 e ホルモン療法薬 f 白金製剤 g 分子標的薬
22. 駆虫薬の作用	A 線虫駆虫薬 B 条虫駆虫薬 C 吸虫駆虫薬 D 抗原虫薬	
23. 殺虫薬・農薬の作用	A 殺虫薬 B 殺鼠薬 C 除草薬	a 有機塩素系 b 有機リン系 c カーバメイト系 d ピレスロイド系 e フェニルピラゾール系 f ネオニコチノイド系 g アベルメクチン系 h 幼虫発育阻害薬
24. その他の薬理作用と毒性	A 重金属拮抗薬 B 中毒治療薬 C 天然毒性物質	
25. 放射線	A 放射線の種類と発生 B 放射性同位元素 C 放射線と物質の相互作用 D 放射線と放射能の単位 E 放射線の線質と測定方法 F 放射線の生物作用 G 放射線の人体への影響	a 照射線量 b 吸収線量 c 線量当量 d 線エネルギー付与 e グレイ f シーベルト g ベクレル a 半価層 b 蛍光ガラス線量計 c 光刺激ルミネッセンス線量計 (OS L線量計) d 電子式線量計 e 熱蛍光線量計 (TLD) f フィルムバッジ g ポケット線量計 h 電離箱 i シンチレーションカウンター j サーベイメーター (GMカウンター) a 放射線障害の基礎 b 放射線治療の基礎 a 急性障害 b 晩発性障害

大項目	中項目	小項目
	H 放射性防護の基本的考え方 I 放射線防護の手段 J 放射線発生装置	c 確率的影響 d 確定的影響 e 体内被ばく f 外部被ばくと内部被ばく a 放射性防護体系 b 実効線量 c 当価線量 d 線量限度 a 管理区域 b 一次線と散乱線 c 防護具 d 被ばく管理 a 加速器

IV 病原体と寄生体

大項目	中項目	小項目
1. 細菌【リケッチア、クラミジア、マイコプラズマを含む。】	A 細菌の一般性状	a 形態〈球菌、桿菌、らせん菌〉 b 構造〈莢膜、べん毛、線毛、細胞壁、細胞質膜、細胞質、核、核様体、芽胞〉 c バイオフィルム
	B 細菌の発育と増殖	a 分裂 b 増殖と増殖曲線〈誘導期、対数期、静止期、死滅期〉 c 二種類以上の菌の混在状態における増殖〈共生、拮抗、衛星現象〉 d 培地の組成 e 培地における発育の特徴 f 増殖に影響する環境要因〈酸素・二酸化炭素の要求性、温度、浸透圧、発育至適pH〉 g バクテリオシン h 細胞内寄生菌 i 生きているが培養できない菌〈VNC〉
	C 細菌の栄養と代謝	a 栄養素 b 化学合成菌〈自家栄養菌、従属栄養菌〉 c 物質の獲得機構 d 異化〈エネルギー産生〉 e 同化〈生合成〉
	D 細菌の遺伝と変異	a ゲノムの構成と機能 b プラスミド c バクテリオファージ d 制限と修飾 e 突然変異 f トランスポゾン g その他の変異 h 遺伝子の発現と調節
	E 遺伝物質の伝達	a 形質転換 b 接合 c 形質導入 d 遺伝子操作
	F 細菌の抵抗性	a 物理的・化学的環境因子〈温度、水分、表面張力、浸透圧、pH、放射線、音波、界面活性剤、殺菌性ガス〉 b 滅菌と消毒
	G 細菌の分類・同定・性状	a Enterobacterales(腸内細菌目) b ビブリオ科 c エロモナス科 d パスツレラ科 e シュードモナス目 f その他のガンマプロテオバクテリア網(レジオネラ目を除く) g ベータプロテオバクテリア網 h アルファプロテオバクテリア網 i バクテロイデス門 j フソバクテリウム門 k らせん菌、スピロヘータ類 l グラム陽性球菌 m グラム陽性芽胞形成桿菌 n グラム陽性無芽胞性桿菌 o 放線菌関連菌(アクチノマイセス門) p レジオネラ目(コクシエラを含む)、マイコプラズマ、リケッチア、クラミジア

大項目	中項目	小項目
2. ウイルス	A ウイルスの一般性状	a 定義 b 測定法 c 構造〈基本構造、核酸、カプシド、エンベロープ、ペプロマー〉 d 構成物質〈核酸、タンパク質、脂質、炭水化物〉
	B ウイルスの増殖過程	a 一段増殖曲線 b 吸着 c 侵入 d 脱殻 e 転写と翻訳 f 核酸の複製 g 集合〈組立て〉 h 放出
	C 感染に伴う細胞の変化	a 細胞変性効果〈CPE〉 b 細胞表面の変化 c 赤血球吸着現象 d 封入体形成 e トランスフォーメーション〈形質転換〉
	D 感染価の測定法	a 50%組織培養感染量〈TCID ₅₀ 〉 b 50%発育鶏卵感染量〈EID ₅₀ 〉 c 50%致死量〈LD ₅₀ 〉 d プラック形成単位〈PFU〉 e ポック形成単位 f フォーカス形成単位〈FFU〉
	E ウイルスの培養	a 動物〈マウス、ウサギなどの実験動物〉 b 発育鶏卵〈至適卵齢、接種方法、ウイルス増殖の判定〉 c 培養細胞〈細胞の種類、細胞培養法、ウイルス増殖の判定〉
	F ウイルスの相互作用	a 干渉 b 増強 c 相補 d 表現型混合〈カプシド変換〉
	G ウイルスの変異	a 変異と変異体 b 変異機構〈点変異、欠損・挿入変異、遺伝子組換え、遺伝子再集合〉 c 変異体〈抗原性変異体、宿主域適応変異体、温度感受性変異体、薬剤耐性変異体〉
	H 遺伝子操作	a リバースジェネティクス b ウイルスベクター
	I ウイルスの不活化	a 機序〈核酸の損傷、タンパク質の変性、エンベロープの破壊〉 b 作用要因〈物理的作用、化学的作用〉
	J ウイルスの分類・同定・性状	a 2本鎖DNAウイルス b 1本鎖DNAウイルス c 逆転写酵素保有DNAウイルス d 2本鎖RNAウイルス e プラス1本鎖RNAウイルス f マイナス1本鎖RNAウイルス g アンビ1本鎖RNAウイルス h 逆転写酵素保有RNAウイルス
3. 真菌	A 真菌の一般性状	a 真菌細胞の微細構造 b 真菌体の形態酵母、菌糸、孢子、二形性菌
	B 真菌の遺伝と分類	a 遺伝学的事項〔生活環、世代交代、性〈雌雄同株、雌雄異株〉〕 b 子囊菌門

大項目	中項目	小項目
		c 担子菌門 d ムーコル門 e ツボカビ門 f 微胞子虫
4. 寄生虫	A 一般性状 B 寄生現象 C 発育と増殖 D 寄生虫の分類と同定 E 原虫類の形態と生活環 F 蠕虫類の形態と生活環 G 節足動物の形態と生活環	a 分類〈原虫、蠕虫、節足動物〉 b 宿主〈終宿主、中間宿主、待機宿主、ベクター〉 a 宿主特異性、寄生部位特異性 b 形態変化 a 変態 b 生殖〈有性・無性生殖、世代交代、単為生殖、幼生生殖〉 c 春季顕性化現象、自家治癒、発育停止 d 体内移行 e プレパテントピリオド f 定期出現性 a Amoebozoa及びExcavata b SAR (アピコンプレックス類、繊毛虫類) a 線虫類 b 吸虫類 c 条虫類 d 鉤頭虫類 a ダニ類 b 昆虫類
5. プリオン	A プリオンの一般性状	

V 発症機序と病理・病態

大項目	中項目	小項目
1. 病因論	A 内因 B 外因 C その他	a 素因 a 物理学的外因 b 化学的外因 c 生物学的外因 (ウイルス、細菌、真菌、寄生虫) d 栄養状態 a 医原病
2. 感染	A 宿主・寄生体関係 B 感染と発症機序 C 寄生体の病原性 D 宿主の防御機構	a 宿主-寄生体関係 b 病原性 c 非病原性 d 毒力 (ビルレンス、菌力) a コッホ (Koch) の条件 b 顕性感染 c 不顕性感染 d 潜伏期 e 感染経路 f 病原体の体内伝播 g 宿主側の状態 [持続感染、保菌、菌血症、ウイルス血症、敗血症、日和見感染] h 二次感染 i 混合感染 j 遅発性感染 k 病原体の排出 a ウイルスの病原性 b 寄生虫の病原性 a 非特異的機構 b 特異的機構
3. 細胞の傷害と死 (退行性病変)	A 細胞傷害の形態変化とタンパク質代謝異常 B 糖質代謝異常 C 脂質代謝異常 D 尿酸代謝異常 E 色素沈着異常	a 混濁腫脹 b 水腫変性 c 空胞変性 d 硝子滴変性 e 硝子変性 f 粘液変性 g アミロイド症 h フィブリノイド (類線維素) 変性 i 病的角化 (角質変性) a 糖原 (グリコーゲン) 変性 b 糖尿病 c 糖原蓄積症 (糖原病) d 遺伝性ムコ多糖症 a 脂肪変性 b 間質の脂肪症 (脂肪浸潤) c 脂質蓄積症 a 尿酸塩沈着 (痛風) a ヘモグロビン b ヘモジデリン c ポルフィリン d ヘマトイジン e 胆色素 (黄疸) f リポフスチン g セロイド h メラニン i 体外性色素 (炭粉、珪酸、アスベスト)

大項目	中項目	小項目
	F 無機質代謝異常 G 壊死 H アポトーシス I 老化 J 封入体形成 K 死後変化	a 石灰沈着 b 銅 c 鉄 d 鉛 a ネクローシス b 凝固壊死 c 液化〈融解〉壊死 d 壊疽 e 脂肪壊死 a 自己融解 b 死後硬直 c 死斑、死冷、死後凝血
4. 適応と修復	A 萎縮 B 細胞増殖のメカニズム C 肥大と増生〈過形成〉 D 化生 E 再生 F 創傷治癒	a 単純萎縮と数的萎縮 b 生理的萎縮 c 栄養障害性萎縮 d 神経性萎縮 e 圧迫性萎縮 f 不使用性萎縮 g 内分泌性萎縮 h 貧血性萎縮 a 細胞周期 a 労働性肥大 b 代償性肥大 a 創傷の種類 b 創傷の性状 c 創傷の治癒機転 d 肉芽組織 e 骨折治癒 f 末梢神経の治癒
5. 循環障害	A 血液の循環障害 B リンパ液の循環障害 C ショック	a 虚血〈乏血〉 b 充血 c うっ血 d 血液凝固と線溶系 e 出血 f 止血と出血性素因 g 血栓症 h 塞栓症 i 梗塞 j 心タンポナーデ a 水腫 b リンパ流出〈リンパ漏〉 a 原因と分類 b 成立機序 c 病態
6. 炎症	A 定義と原因 B 炎症のメディエーター C 炎症の組織反応	a 血管反応 b 細胞反応 c 修復 d 急性炎症と慢性炎症

大項目	中項目	小項目
	D 炎症の病態〈影響〉 E 炎症の種類	a 局所 b 全身 c 敗血症 a 漿液性炎 b 線維索性炎 c 出血性炎 d 化膿性炎 e 壊死性炎 f 壊疽性炎 g 増殖性炎 h 肉芽腫性炎
7. 損傷	A 機械的損傷 B 理学的損傷 C 化学的損傷 D 病的損傷	a 挫傷 a 熱傷 b 凍傷 c 電氣的損傷 d 放射線損傷 a 壊死 b 壊疽 c 潰瘍 d 瘻(管) e びらん f 穿孔
8. 免疫異常、アレルギー〈過敏症〉	A 自己免疫疾患 B 免疫不全症 C アレルギー	a 全身性自己免疫疾患 b 臓器特異的自己免疫疾患 a 原発性免疫不全症候群 b 続発性免疫不全症候群 a I～IV型アレルギー
9. 腫瘍	A 定義と分類 B 腫瘍学で用いられる用語 C 腫瘍の形・性状と良性腫瘍・悪性腫瘍の鑑別 D 生体に及ぼす影響 E 腫瘍免疫 F 腫瘍の原因 G 腫瘍の種類	a 良性腫瘍と悪性腫瘍 b 上皮性腫瘍と非上皮性腫瘍 c 発生母組織との類似性 d 命名法 a 実質、間質 b 退形性 c 異形成、異型性 d 過誤腫、分離腫 e 不顕性癌 a 成長様式・速度 b 色調・質感 c 腫瘍細胞の特徴 d 腫瘍の浸潤・転移 a 悪液質 b 腫瘍随伴症候群 c 機能性腫瘍 a 腫瘍抗原 b 腫瘍の免疫学的監視機構 c 抗腫瘍免疫からの回避機序 a 癌関連遺伝子 b 腫瘍発生の内因・外因 c 発癌機序 a 上皮性腫瘍(良性・悪性) b 非上皮性腫瘍(良性・悪性) c 混合腫瘍 d ウイルス性腫瘍

大項目	中項目	小項目
10. 奇形〈先天異常〉	A 原因 B 奇形の分類	a 内因〈染色体異常、遺伝子の異常〉 b 外因〈感染性因子、化学的因子、物理的因子〉 c 臨界期 a 重複奇形 b 単体奇形〈外表奇形、臓器奇形〉 c 組織奇形
11. 環境性疾患〈毒性病理学の基礎〉	A 毒性病理学の概念と基礎	

VI 主要症候

大項目	中項目	小項目
1. 全身性の主要症候	A 意識障害 B ショック C 起立不能（困難） D 衰弱 E 充血・チアノーゼ F 黄疸 G 体温の異常 H 悪液質 I 脱水 J 食欲の異常 K 飲水の異常 L 消瘦 M 肥満 N 胸水 O 腹水 P 浮腫 Q 気胸 R 気腫 S リンパ節腫脹 T 発育不良と虚弱	a 減退 b 消失 c 異常亢進
2. 呼吸器症候	A くしゃみ B 鼻汁 C 喘鳴 D 発咳 E 咯血 F 呼吸リズム・運動の異常 G 呼吸数の異常 H 呼吸音の異常	a 閉塞性換気障害 b 拘束性換気障害
3. 循環器症候	A 心雑音 B 心悸亢進 C 心拍、脈拍の異常 D 血圧の異常 E 心音の異常 F 運動不耐性 G 失神	a 収縮期 b 拡張期 c 連続性 a 頸静脈の怒張 b 頸静脈拍動 c 脈拍数、質、脈拍リズムの異常 d 不整脈 a 低血圧 b 高血圧 a ギャロップ b クリック c 分裂音

大項目	中項目	小項目
4. 消化器症候	A 口臭 B 異嗜 C 採食・咀嚼・嚥下障害 D 反芻の障害 E 鼓脹〈噯気反射障害〉 F 流涎 G 嘔吐 H 吐出〈逆流〉 I 吐血 J 下血 K 便性状の異常 L 排便障害〈困難〉 M 胃腸運動の異常 N 腹痛、疝痛 O 腹部膨満	a 口腔内の異常 b 咽頭の異常 c 食道の異常 d 通過障害 e 誤嚥 a 噯気の過剰形成 b 噯気の排出障害 a 便秘 b 粘液便 c 脂肪便 d 白痢〈白色下痢〉 e 緑便 f 軟便 g 泥状便 h 水様下痢 i 鮮血便 j 粘血便 k メレナ l 赤痢
5. 泌尿器症候	A 乏尿、無尿 B 多尿 C 排尿動作の異常 D 尿性状の異常	a 頻尿 b 排尿困難 c 尿閉 d 排尿失禁 e 排尿痛 f 排尿姿勢の異常 g 尿淋瀝 a タンパク尿 b 糖尿 c ビリルビン尿 d ケトン尿 e アセトン尿 f 血尿 g 血色素尿 h 筋色素尿 i 膿尿 j 細菌尿 k 尿沈渣 l PH m 比重

大項目	中項目	小項目
6. 繁殖障害と生殖器症候	A 発情の異常 B 不妊症 C 低受胎〈リピートブリーディング〉 D 流産 E 難産〈異常分娩〉 F 悪露の異常 G 交尾障害 H 生殖不能症	a 無発情 b 鈍性発情 c 持続性発情 d 短発情 e 無排卵性発情 a 交尾欲の異常 b 交尾不能
7. 運動器症候	A 筋弛緩 B 筋萎縮 C 筋硬直 D 疼痛、腫脹 E 姿勢の異常 F 歩行の異常	
8. 神経系症候	A 不随意運動 B けいれん C 運動麻痺 D 運動失調 E 知覚障害 F 反射障害 G 自律神経障害 H 意識障害 I 異常運動 J 脱力 K 捻転斜頸	a (完全) 麻痺と不全麻痺 a ホルネル症候群 b 反射性(神経調節性)失神
9. 感覚器症候	A 眼の異常 B 耳の異常 C 嗅覚障害 D 発声異常	a 視覚障害 b 眼の疼痛・腫脹 c 眼の充血・出血 d 流涙、眼脂 e 眼球の突出と陥凹 f 眼球の異常運動 a 聴力障害 b 耳の痒覚 c 耳の疼痛 d 耳漏・耳垂れ
10. 血液・造血器症候	A 貧血 B 溶血 C 出血傾向 D 血栓傾向 E 赤血球増加 F 白血球増加 G 白血球減少 H 血小板増加	

大項目	中項目	小項目
	I 血小板減少 J 免疫異常、免疫不全	
11. 内分泌・代謝・栄養 症候	A 低タンパク血症 B 高タンパク血症 C 糖尿、血糖の異常 D 脂質代謝異常 E 肥満症 F 水・電解質の代謝異常 G 酸塩基平衡の異常 H 肝性脳症	
12. 皮膚・体表症候	A 皮疹 B 被毛の異常 C 腫瘤 D 発汗 E 脂漏 F 掻痒 G 角化の異常 H 膿皮症 I 皮温低下・皮温不整 J 点状出血 K 粘膜充血 L 粘膜蒼白	a 不全角化 b 錯角化 c 過角化 d 皮角
13. 乳房・乳腺症候	A 乳房腫脹 B 乳汁分泌異常 C 無乳汁 D 漏乳 E 血乳	
14. 行動症候	A 攻撃行動 B 恐怖・不安行動 C 沈うつ D 興奮 E 過剰発声 F 不適切な場所での排泄 G 常同行動 H 自傷行動 I 多動 J 認知機能低下	

VII 検査と診断

大項目	中項目	小項目
1. 問診	<p>A 病歴の聴取・稟告</p> <p>B 身体検査</p> <p>C 診療記録</p>	<p>a 個体識別（分娩日、産次数）</p> <p>b 飼育環境</p> <p>c 予防歴（ワクチン）</p> <p>d 家族歴</p> <p>e 既往歴</p> <p>f 現病歴</p> <p>a 検温</p> <p>b 視診</p> <p>c 触診【直腸検査を含む。】</p> <p>d 聴診</p> <p>e 打診</p> <p>f 探診</p> <p>g 嗅覚検査</p> <p>h 聴覚検査</p> <p>i 排せつ物の検査</p> <p>j 姿勢・歩様検査</p> <p>a 保管期間</p> <p>b 問題志向型診療記録（POMR）</p>
2. 動物の保定	<p>A 牛・馬・豚の保定</p> <p>B 小動物の保定</p>	
3. 検査の基礎	<p>A 意義と目標</p> <p>B 種類と特性</p> <p>C 結果の判定と解釈</p> <p>D 機器・機材の安全な取扱い</p>	
4. 臨床病理検査 ①検体検査	<p>A 検体の採取と保存</p> <p>B 一般臨床検査</p> <p>C 血液検査</p> <p>D 血液生化学検査</p>	<p>a 採血（種類、部位）</p> <p>b 採尿</p> <p>c 第一胃内容液採取</p> <p>d 生体穿刺</p> <p>e 生検、細胞診</p> <p>f 保存法と保存期間</p> <p>a 乳汁検査</p> <p>b 糞便検査</p> <p>c 尿検査</p> <p>d 脳脊髄液検査</p> <p>e 穿刺液検査</p> <p>f 精液検査</p> <p>g 胃内容液検査</p> <p>h 分泌液検査</p> <p>a 細胞学的検査</p> <p>b 赤血球指数</p> <p>c 超生体染色</p> <p>d 血球像</p> <p>e 血小板</p> <p>f 出血、凝固系</p> <p>g 赤血球抵抗</p> <p>h 寄生体</p> <p>i 血液ガス検査（動脈、静脈）</p> <p>a 血清タンパク質</p> <p>b 酵素</p> <p>c 糖質</p> <p>d 低分子窒素化合物</p> <p>e 有機酸</p>

大項目	中項目	小項目
		f 脂質 g ビタミン h 無機質 i 色素 j 微量元素 k 電解質 l 酸塩基平衡 m 血清総胆汁酸
	E 免疫学的検査	a 皮内反応 b 免疫グロブリン c 自己抗体 d 補体 e 細胞性免疫 f 沈降反応 g 凝集反応 h 補体結合反応 i 中和反応 j 赤血球凝集抑制反応 k 溶血反応 l 免疫溶菌反応 m ELISA n 蛍光抗体法 o 標識試験法 p 色素試験 q ウェスタンブロット r 免疫クロマトグラフィー s フローサイトメトリー検査
	F 微生物学的検査	a 染色法 b 培養法 c 分離・同定法 d 菌数測定法 e ウイルス感染価の測定法
	G 寄生虫学的検査	f 薬剤感受性試験 a 虫卵・虫体検査法〈糞便、尿、喀痰、肛門周囲、生検材料〉 b 集卵法 c 虫卵培養法〈消化管内線虫類〉 d 子虫游出法〈牛肺虫〉 e 分離・同定法〈原虫類〉 f 標本作製法 g 皮膚搔爬検査法 h 圧平法 i 血液検査法 j 免疫学的検査法 k 寄生程度の判定法〈EPG、OPG、LPG〉
	H 遺伝子検出による診断	l 消化法 a ハイブリダイゼーション b PCR〈リアルタイムPCR〉 c 核酸の電気泳動 d ゲノム解析
	I 病理（組織）学的検査、生検、細胞診	a 病理解剖 b 生検 c 標本作製 d 染色 e 組織化学

大項目	中項目	小項目
		f 蛍光顕微鏡 g オートラジオグラフィ h 電子顕微鏡 i 免疫組織化学 j 酵素抗体法 k <i>in situ</i> ハイブリダイゼーション l 細胞診
②生体の機能検査	A 内分泌検査 B 肝・胆道機能検査 C 膵・腸機能検査 D 腎機能検査 E 心機能検査 F 神経系・筋の検査 G 眼科検査 H 蹄病検査	a 視床下部 b 下垂体 c 甲状腺 d 上皮小体 e 副腎皮質 f 副腎髄質 g 膵島、消化管 h 性腺 a 負荷試験 b 内分泌機能 c 外分泌機能 d 血行動態 e 糸球体・尿細管機能 a 血圧 b 心電図 c 心音図 d X線検査 e 超音波検査 a 脳波（脳電図、EEG） b 筋電図 c 神経学的検査 a 視覚試験 b 反射試験 c 流涙量検査 d 染色検査 e 鼻涙管疎通試験 f 眼圧検査 g スリットランプ検査 h 眼底検査 i 網膜電図検査
5. 妊娠診断	A ノンリターン法 B 直腸検査法 C 膣検査法 D 子宮頸管粘液検査法 E ホルモン検出診断法 F 妊娠関連糖タンパク質の検出 (PAG) G 超音波検査法 H 腹部触診法 I X線診断法	a 胎膜スリップ b 羊膜囊の触知 c 妊角の膨大 d 子宮動脈の震動 a 胎子・胎膜の確認 b 双子妊娠
6. 繁殖障害の診断	A 乗駕試験 B 射精試験 C 精液・精子の検査	

大項目	中項目	小項目
	D 膣及び膣粘液検査 E 子宮頸管粘液の性状検査 F 直腸検査 G 超音波検査 H 子宮洗浄 I 子宮内膜バイオプシー J 卵管疎通性検査 K 内分泌検査 L 染色体検査	a 子宮の触診 b 卵巣の触診
7. 画像診断	A X線検査 B 超音波検査 C 内視鏡検査 D コンピューター断層撮影 (CT) 検査 E 放射性同位元素を用いた画 像診断 F 磁気共鳴画像 (MRI) 検査	a X線像成立の基本 b 診療用X線発生装置 c X線撮影の基本的器材 d デジタルラジオグラフィ (DR) e X線写真に影響する因子 f X線撮影法【保定法、保定具を含む。】 g X線解剖 h X線読影技術【所見記述法を含む。】 i 造影剤と造影検査 j X線透視法 a 超音波検査の基本原理 b 超音波検査装置と周辺機器 c 超音波の音響特性 d 超音波の生体内特性 e ハーモニックイメージング f 超音波ドプラ法 g 超音波検査技術 h 超音波読影法 i アーチファクト j 超音波生検法 a 内視鏡の基本原理 b 内視鏡の器材と構成 c 内視鏡による生検 d 消化管内視鏡検査 e 腹腔鏡 f 関節鏡 g 内視鏡下手術 a CT検査の基本原理 b CT読影 c アーチファクト a 基本原理 b シンチグラフィ c 単一光子放射断層読影法 (SPECT) d 陽電子断層読影法 (PET) a MRIの基本原理 b MRIの器材の構成と種類 c T1強調画像 d T2強調画像 e MRI読影 f アーチファクト

VIII 治療と処置

大項目	中項目	小項目
1. 治療の基礎	A 治療の意義と目的 B 治療法の概念	a 疾病の治療と自然治癒 a 原因的療法 b 対症的療法
2. 治療の準備	A 保定 B 消毒	
3. 治療の基本手技	A 薬物の投与 B 注射法 C 穿刺 D 瀉血 E 洗浄 F 浣腸 G 塗擦、塗布 H 罨法 I 整歯	a 経口投与 b カテーテル投与 c 第一胃内直接投与 d 注腸 e 吸入 f 子宮内注入 g 気道投与 a 皮下注射 b 筋肉内注射 c 静脈内注射 d 皮内注射 e 点滴 f 関節腔内注射 g 尾椎注射 h 卵巣直接注射 i 乳房内注入・膀胱内注入 j 骨髄内注射 k 点眼・点鼻・点耳 a 胸腔穿刺 b 心膜穿刺 c 第一胃穿刺 d 腹腔穿刺 e 膀胱穿刺 a 体表洗浄 b 鼻腔洞腔洗浄 c 口腔洗浄 d 胃内洗浄 e 尿道・膀胱洗浄 f 洗眼、点眼 g 子宮洗浄 h 耳洗浄、点耳 i 関節洗浄 j 肺胞洗浄 k 胸腔洗浄
4. 繁殖技術	A 発情の同期化 B 排卵の同期化と定時人工授精 C 人工授精	a 黄体退行法 b ジェスタージェン投与方法 a オブシク法 b ジェスタージェンと多剤併用法 a 人工授精の利害と損失 b 精液の採取 c 精液・精子の検査 d 精液の希釈と保存

大項目	中項目	小項目
	D 胚（受精卵）の移植 E 体外受精 F 避妊 G 分娩調整 H 人工流産 I その他の技術	e 精液の注入 a 胚移植の利害と損失 b 過剰排卵誘起 c 胚の採取・処理 d 胚の保存 e 胚の移植 a 卵子の採取と体外成熟 b 体外受精 c 受精卵（胚）の体外培養 a 雄性避妊 b 雌性避妊 a 分娩誘起 b 分娩遅延処置 a 性支配（X精子とY精子の分離、胚の性別） b キメラ c 遺伝子組換え動物 d クローン動物
5. 救急処置、集中治療	A 心肺蘇生法 B 集中治療法	a 心肺停止の評価 b 気道確保 c 人工呼吸 d 胸部圧迫 e 薬物療法 f 除細動 g 自己拍動再開後の判断と処置
6. 損傷の治療と処置	A 創傷の治療と処置 B 挫傷の治療と処置 C 理学的損傷の治療と処置 D 化学的損傷の治療と処置 E 病的損傷の治療と処置	a 創及び周囲の清浄化 b 止血 c 辺縁切除 d 縫合 e 包帯 f 排液 g 移植
7. 炎症の治療と処置	A 全身療法 B 局所療法	
8. 腫瘍の治療	A 手術療法 B 化学療法 C 放射線療法 D その他の療法	a 免疫療法 b 冷凍（凍結）外科療法
9. 薬物療法の基本	A 投与量 B 特異体質 C 耐性 D 過敏性 E 蓄積作用 F 協力作用 G 拮抗作用 H 配合禁忌	
10. 抗菌薬治療の基本	A 静菌作用と殺菌作用	

大項目	中項目	小項目
	B 抗菌スペクトル C 薬剤感受性 D 多剤耐性と交差耐性 E 菌交代現象 F 副作用	
11. 栄養管理	A 栄養管理の基礎 B 栄養の補給法	a 基礎エネルギー要求量 b 維持エネルギー要求量 c タンパク要求量 d 水分要求量 a 経腸栄養 b 静脈栄養〈全静脈栄養、部分静脈栄養〉
12. 輸液	A 輸液の目的 B 輸液の一般的注意 C 輸液の種類と投与方法 D 輸液の副作用	
13. 輸血	A 輸血の一般的注意 B 血液の採取と保存 C 輸血の適応症と禁忌 D 輸血法 E 輸血の副作用	a 血液の適合性 b 交差〈交叉〉適合試験 c 血液型 a 供血動物の選択 b 新鮮血と保存血 c 全血輸血と成分輸血
14. 血液浄化	A 血液透析 B 腹膜透析	
15. 放射線治療	A 放射線治療装置 B 放射線の治療効果に寄与する要因 C 主要適応症 D 放射線障害とその対策	a 線質と生物学的効果比〈LET、RBE〉 b 酸素効果 c 正常組織耐容線量と腫瘍致死線量 d 分割照射と回復、再酸素化 e 線量分布 f 他療法との併用効果 a 腫瘍の放射線感受性 a 全身的影響 b 局所的影響〈急性障害、晩発性障害〉
16. 麻酔	A 術前管理 B 局所麻酔 C 全身麻酔 D 不動化、麻酔前投薬 E 注射麻酔薬	a 術前状態の評価 b 麻酔法の選択 c 血管確保 d 術前の絶食 e 麻酔前投薬 f 鎮静薬・鎮痛薬の併用 a 局所麻酔薬の種類と特性 b 局所麻酔法の種類と適用〈脊椎麻酔、硬膜外麻酔、伝達麻酔、静脈内局所麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、周囲麻酔〉 a 麻酔の作用機序 b 麻酔の段階と徴候 a 麻酔前投薬の目的 b 神経遮断薬〈NLA〉 a バルビツレート b ケタミン c プロポフォール d アルファキサロン

大項目	中項目	小項目
	F 筋弛緩薬 G 吸入麻酔薬 H 麻酔器具と用具 I 麻酔導入、術中モニタリングと管理 J 術後管理と合併症 K 疼痛管理	a 麻酔薬の種類と特性 b 取り込みと排泄 a 医療ガスの供給と余剰ガスの排泄機構 b 麻酔器と麻酔回路 c 気管挿管に必要な器具 a 麻酔の維持法 b 麻酔深度のモニタリングと管理 c 呼吸器系のモニタリングと管理 d 循環器系のモニタリングと管理 e 体温のモニタリングと管理 f 人工呼吸器と人工呼吸法 g 麻酔係と麻酔記録 a 麻酔・手術からの回復 b 呼吸器系 c 循環器系 d 泌尿器系 e 代謝系 f 体温の異常 a 疼痛の機序と疼痛管理の理論 b 疼痛の評価 c 予防的（先制）鎮痛とマルチモーダル鎮痛 d 術後疼痛及び急性痛の管理 e 慢性痛の管理 f 癌性痛の管理
17. 外科手術の基本	A 準備と消毒 B 手術器具・機材 C 基本的手術手技	a 無菌手術の概念と重要性 b 手術施設の構造と管理 c 手術器材の準備と消毒 d 手術者の準備と消毒 e 術野の準備と消毒 a 一般手術器具・機材 b 特殊手術器具・機材 a 分割法 b 止血法 c 結紮法 d 縫合法 e 排液法 f 包帯法
18. 産科処置の基本	A 救助の準備 B 産科用器具・機材 C 産科処置の基本手技	a 難産の診断 b 胎子失位の整復 c 胎子の牽引摘出 d 胎水吸引 e 帝王切開術切胎術
19. リハビリテーション	A 機能解剖学 B 運動生理学 C 運動療法 D 物理療法	a ストレッチ b 筋力増強訓練 c 協調性訓練 d 歩行訓練 a 水治療法 b 熱療法（温熱療法、低温療法） c 電気刺激療法 d マッサージ

大項目	中項目	小項目
	E リハビリテーションの評価	e レーザー光線療法 f 超音波療法 g 針灸療法
20. 行動治療の基本	A コンサルテーション B 行動修正法 C 薬物療法 D 外科的療法とその他の療法	a 刺激制御（環境操作） b 順化 c 洪水法 d 系統的脱感作 e 拮抗条件づけ f 消去 g 行動置換法 h 罰
21. 動物の安楽死法	A 安楽死の方法	

衛生学に関する事項

獣医師として身につけておくことが必要な公衆衛生及び飼育動物の保健衛生に関する知識・技能を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 動物衛生と公衆衛生	微生物学、動物感染症学、寄生虫病学、動物衛生学、公衆衛生学総論、疫学、野生動物学
II 動物の飼育・衛生管理	実験動物学、動物感染症学、動物衛生学、家禽疾病学
III 魚類の飼育・衛生管理	魚病学
IV 食品衛生	食品衛生学、疫学
V 人獣共通感染症	動物感染症学、人獣共通感染症学、疫学、野生動物学、家禽疾病学
VI 環境衛生	環境衛生学、野生動物学

I 動物衛生と公衆衛生

大項目	中項目	小項目
1. 動物衛生の考え方と概要	A 定義、目的、活動	a 動物衛生の目的 b 動物衛生活動の進め方
	B 動物衛生の動行 ①畜産統計 ②疾病統計	
	C 家畜疾病の発生と予防活動	a 家畜の死産事故 b 衛生管理ガイドライン
	D 公衆衛生分野との連携	a 公衆衛生に関連する動物衛生分野
2. 公衆衛生の考え方と概要	A 定義、目的、活動	a 公衆衛生の目的 b 公衆衛生活動の進め方
	B 国民衛生の動向 ①人口統計	a 国民衛生の動向を示す指標とその求め方 b 人口静態 c 人口動態 d 生命表 e 国民生活基礎調査
	②疾病統計	a 感染症発生動向調査 b 食中毒統計 c 患者調査
	③生活環境衛生統計と環境保健統計	a 生活環境衛生の動向 b 環境保全の動向
C 疾病の発生と予防活動	a 疾病の発生要因 b 疾病の予防活動	
D 動物衛生分野との連携	a 動物衛生に関連する公衆衛生分野	
3. 疫学の方法論	A 疫学の方法論	a 疫学の定義と目的 b 獣医疫学の対象と範囲
	B 標本の抽出法	a 母集団と標本 b 標本の抽出法 c 標本抽出デザイン d 標本サイズ
	C 疫学指標	a 発生率（罹患率） b 累積罹患率 c 死亡率、累積死亡率 d 有病率 e 致命率（致死率） f 発病率 g 相対頻度 h 相対リスク i 寄与リスク j オッズ比
	D 記述疫学	
	E 分析疫学	a 症例対照研究 b 生態学的研究 c 横断研究 d コホート研究
	F その他の疫学	a 介入研究（実験疫学） b 理論疫学 c 血清疫学 d 分子疫学
	G 因果関係	a 発生要因（宿主要因、病因要因、環境要因）とリスク因子 b 因果関係の判定
	H 誤差とその抑制	a 偶然誤差とバイアス

大項目	中項目	小項目
	I サーベイランス J スクリーニングとその評価法 K 疫学に必要な統計手法 L リスクアナリシス M 疾病及び対策の経済的評価 N 疫学資料	b バイアスの抑制 a 敏感度、特異度、陽性反応の中度、陰性反応の中度 a データの種類、分布、信頼区間、統計量 b 推定 c 仮説検定 d 関連性の分析 a 目的と意義 b ハザード特定、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーション c 解析手法 a 目的と意義 b 手法の種類と原理（損失調査法、部分査定法、効果測定法、粗利益分析、決定分析、費用効果分析、便益費用分析） a 疫学解析に利用可能な既存資料の収集・利用法
4. 疾病の予防と防疫	A 人と家畜の疾病制御 B 野生動物の疾病制御	a スクリーニングテスト b 予防接種 c サーベイランス d モニタリング e 撲滅計画 a 保全生物学的リスク
5. 感染症とその対策	A 感染症の疫学 B 感染症の予防、制御 C 家畜の悪性伝染病に対する国家防疫 D バイオハザードと病原体の危険度分類 E 法規	a 感染症成立要因（宿主要因、病因要因、感染経路） b 感染の形態（症状の発現と感染性、感染の状態） c 基本再生産数 d 流行の様相（生物学的現象、時間的現象、地理的現象、社会的現象） e 流行の機序（定義、種類、要因） a 動物用医薬品の適正使用・慎重使用 b 薬剤耐性菌の出現とその抑制法 c ワクチン（種類、特性、投与方法、副反応、プログラム） d 感染源・感染経路対策（消毒、検疫、隔離、殺処分、焼却、埋却、摘発淘汰、移動制限、衛生動物駆除） a 越境性家畜伝染病とその国家防疫 b 家畜の新興・再興感染症の出現メカニズムとその防疫 c WOHのリスト疾病 a 病原体の危険度分類 b バイオハザード対策 a 家畜伝染病予防法（家畜伝染病、届出伝染病） b 特定家畜伝染病防疫指針 c 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（動物由来感染症） d 検疫法 e 狂犬病予防法
6. 臨床疫学	A 予後の評価 B 診断 C 予防	

大項目	中項目	小項目
	D 根拠	
7. 動物衛生行政	A 組織 B 法規	
8. 公衆衛生行政	A 獣医師の役割 B 組織 C 法規	
9. 人と動物の共生	A 人と動物の共生の歴史 B 人と動物の共生に関連する問題と獣医師の役割 C 人と動物の共生を目指した公衆衛生行政の取り組み	a 適正飼養 b 普及啓発 c 問題行動 d 動物福祉

II 動物の飼育・衛生管理

大項目	中項目	小項目
1. 家畜の管理衛生	A 家畜の管理形態	a 家畜飼養形態の変遷〔個体管理、群管理（ハードヘルス）〕 b 畜舎管理と放牧管理 c 分娩房の整備
	B 一般環境要因	a 空気 b 気象要因 c 家畜の体温と環境への適応 d 気候 e 水 f 土壌 g 光
	C 生産衛生	a 畜舎環境と衛生対策 b 乳牛の管理衛生（新生子牛の管理衛生、育成牛の管理衛生、泌乳牛の管理衛生、乳生産管理衛生、搾乳衛生、疾病制御） c 肉牛の管理衛生（肉牛の繁殖、子牛の衛生管理、疾病制御） d 豚の管理衛生（一般衛生管理、疾病制御、SPF豚の管理衛生） e 鶏の管理衛生（孵化場の管理衛生、初生雛・幼雛の管理衛生、ブロイラーの管理衛生、採卵鶏の管理衛生、疾病制御） f 特有家畜 g 農場HACCP h 飼養衛生管理基準 i 飼育施設の消毒 j 動物福祉・管理
	D 放牧衛生	a 日本における放牧の現状と特質 b 放牧環境要因（気象的要因、地勢的要因、生物的要因） c 放牧地の管理（草地の管理、衛生動物と有毒植物対策、放牧施設の管理） d 放牧家畜の管理（放牧形態の種類、放牧家畜の衛生管理） e 放牧病
	E 輸送衛生	a 牛・馬・豚の輸送〔輸送ストレス、輸送衛生管理、輸送熱、PSE肉（むれ肉）〕 b 輸送性疾患の病原体と免疫機能要因
	F 牛の遺伝性疾患への対応	a 牛白血球粘着不全症 b 牛複合脊椎形成不全症 c クローディン16欠損症 d バンド3欠損症 e 第XIII因子欠乏症 f チェディアック・東症候群 g モリブデン補酵素欠損症
	G 人への影響	a 人獣共通感染症の予防
2. 家畜の衛生的生産	A 安全な畜産物	a 人獣共通感染症の予防 b 食中毒菌の保菌防止 c 農場HACCPとGAP d ポジティブリスト制度
	B 畜産廃棄物	a 家畜ふん尿の処理 b 畜産廃棄物の処理と資源化

大項目	中項目	小項目
3. 家畜の飼養衛生	A 飼養 B 栄養単位 C 飼料の分類 D 飼料の給与法 E 飼料の鑑定 F 飼料の変質 G 飼料の安全性の確保	a 飼養標準 a 可消化養分総量 (TDN) b 可消化エネルギー (DE) c 代謝エネルギー (ME) d 正味エネルギー (NE) e アイディアルプロテイン a 粗飼料 b 濃厚飼料 c 混合飼料 (TMR) d サイレージ e 動物質飼料 a 飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律 b 農薬 c 動物用医薬品 d 飼料添加物
4. 生産獣医療システム	A 生産獣医療の概念 B 栄養管理 C 繁殖管理 D 搾乳管理 E 護蹄管理 F 育成管理 G 予防衛生管理	a 代謝プロファイルテスト (MPT) b 代謝異常 c ボディコンディションスコア (BCS) a 飼養管理 b 疾病管理
5. 小動物 (伴侶動物) の飼養衛生管理	A 健康管理 B 栄養管理 C 人への影響	a 人獣共通感染症の予防飼養管理
6. 実験動物の飼育と衛生管理	A 主な実験動物とその特性 【分類学上の位置、主な品種・系統、形態的特性、機能的特性、実験動物としての特徴を網羅する。】	a マウス b ラット c シリアンハムスター d チャイニーズハムスター e スナネズミ f マストミス g モルモット h ウサギ i スンクス j イヌ k ネコ l フェレット m ブタ n ヒツジ o ヤギ p サル (アカゲザル、カニクイザル、コモンマーモセット、コモンリスザル) q ニワトリ r ウズラ s アフリカツメガエル t メダカ u ゼブラフィッシュ

大項目	中項目	小項目
	B 実験動物の生産供給	v 無脊椎動物 a 育種の基礎・育種上の分類 b 各種系統の定義、遺伝的統御（交配）の様式、維持・生産 c 質的形質と量的形質の遺伝学的解析 d 動物種間の遺伝的相同性 e 遺伝的モニタリング f 微生物モニタリング g 発生工学的手法による開発〔トランスジェニック動物、標的遺伝子組換え動物、クローン動物〕 h 発生工学技術の基本（採卵、体外受精、培養、偽妊娠動物、胚移植、顕微授精、凍結保存） i 繁殖生理 j 繁殖技術 k 輸送
	C 実験動物の飼育管理	a 気候・物理・化学的因子の影響 b 栄養・生物学的・居住的因子の影響 c 実験動物施設
	D 人の安全確保	a 人獣共通感染症の予防 b バイオハザードとケミカルハザード c 動物実験と環境保全
	E 実験動物の感染症	a ティザー病 b ネズミコリネ菌症 c 溶血レンサ球菌症 d 肺炎球菌症 e ブドウ球菌症 f 緑膿菌症 g マウス腸粘膜肥厚症 h ウサギ大腸菌症 i サルモネラ症 j フィロバクテリウム症（カーバチルス病） k 気管支敗血症菌症 l パスツレラ症 m ヘリコバクター症 n 細菌性赤痢 o 結核 p 赤肢病 q センダイウイルス感染症 r マウス肝炎ウイルス感染症 s マウス肺炎ウイルス感染症 t マウス脳脊髄炎 u 乳酸脱水素酵素上昇ウイルス感染症 v エクトロメリア w マウスロタウイルス腸炎 x ウサギロタウイルス感染症 y リンパ球性脈絡髄膜炎 z マウスノロウイルス感染症 aa パルボウイルス感染症《マウス、ラット》 ab マウス白血病 ac マウス乳癌 ad 唾液腺涙腺炎 ae Bウイルス感染症 af サイトメガロウイルス感染症

大項目	中項目	小項目
		ag 兔粘液腫 ah 兔出血病 ai ショーブ乳頭腫 aj エボラ出血熱 ak マールブルグ病 al ハンタウイルス感染症 am エムポックス an マイコプラズマ症 ao 皮膚糸状菌症 ap ウサギコクシジウム症 aq エンセファリトゾーン症 ar 腸トリコモナス症 as ジアルジア症 at アメーバ赤痢 au ニューモシスチス症〈ニューモシスチス肺炎〉 av 小形条虫症 aw 縮小条虫症 ax 蟻虫症 ay サル腸結節虫症 az サル糞線虫症 ba ウサギの耳疥癬
7. みつばちの衛生管理	A みつばちの感染症	a 腐蛆病 b チョーク病 c ノゼマ症 d バロア症 e アカリンダニ症
8. 展示動物の衛生管理		

III 魚類の飼育・衛生管理

大項目	中項目	小項目
1. 魚類の飼育と衛生管理	A 魚類の分類	a 有用魚類
	B 魚類の正常な構造と機能	a 皮膚 b 骨格 c 筋肉 d 呼吸 e 循環、造血 f 消化、吸収 g 神経、感覚 h 内分泌、生殖 i 浸透圧調節 j 浮力調節
	C 魚類の飼育	a 種苗〈人工種苗、天然種苗〉 b 栄養と飼料・餌料 c 水質 d 飼育・養殖法
	D 魚類の生体防御	a 非特異的生体防御 b 特異的生体防御
2. 魚病の診断・予防・治療	A 鎮静・麻酔法	a 鎮静・麻酔薬剤 b 鎮静・麻酔の段階と徴候
	B 診断法	
	C 予防・治療法	a 水産用医薬品〈ワクチン、抗菌薬等〉 b 水産関連法規
3. 魚類の疾病	A ウイルス性疾病	
	①RNAウイルス	a ウイルス性出血性敗血症〈VHS〉 b 伝染性造血器壊死症〈IHN〉 c 伝染性脾臓壊死症〈IPN〉 d ウイルス性腹水症 e ヒラメラブドウイルス病〈ヒラメのVHS〉 f ウイルス性神経壊死症〈VNN〉 g コイ春ウイルス血症〈SVC〉 h 赤血球封入体症候群〈EIBS〉
	②DNAウイルス	a サケ科魚類のヘルペスウイルス感染症〈SaHVD, OMVD〉 b コイヘルペスウイルス病〈KHVD〉 c リンホシスチス病〈LD〉 d コイの上皮腫〈コイのヘルペスウイルス性乳頭腫症〉 e マダイイリドウイルス病 f クルマエビの急性ウイルス血症 g バキュロウイルス性中腸腺壊死症 h アユの異型細胞性鰓病〈ACGD〉 i ウイルス性コイ浮腫症〈ウイルス性眠り病〉 j キンギョのヘルペスウイルス性造血器壊死症 k ウナギのウイルス性血管内皮壊死症
	B 細菌性疾病	
	①グラム陰性桿菌	a ビブリオ症 b 運動性エロモナス症 c せっそう病 d 非定型エロモナス・サルモニサイダ感染症 e シュードモナス症 f エドワジエラ症

大項目	中項目	小項目
		g レッドマウス病 (ERM) h 細菌性鰓病 (BGD) i カラムナリス病 j 海産魚の滑走細菌症 (海水性滑走細菌症) k 細菌性冷水病 l 類結節症 m 細菌性溶血性黄疸
	②グラム陽性桿菌	a 細菌性腎臓病 (BKD) b 非結核性抗酸菌症 (NTM)
	③グラム陽性球菌	c ノカルジア症 a レンサ球菌症 b 乳酸菌症
	C 真菌性疾病	
	①卵菌類	a ミズカビ病 b 流行性肉芽腫性アフノマイセス症 c サケ科魚類稚魚の内臓真菌症
	②イクチオスポレア類	a イクチオホヌス症
	③不完全菌類	a オクロコニス症 b 胃鼓脹症 c フサリウム症
	D 原虫性疾病	
	①鞭毛虫	a アミルウージニウム症 b イクチオボド症
	②繊毛虫	a 白点病 (淡水性、海水性) b キロドネラ症 c トリコジナ症 d エピスチリス症 e スクーチカ症 (マイアミエンシス症)
	E 微孢子虫性疾病	a ヘテロスポリス症 (ウナギのベコ病) b グルゲア症 c ミクロスポリジウム症 (ブリのベコ病)
	F 粘液胞子虫性疾病	a 旋回病 b 筋肉クドア症 c 粘液胞子虫性側湾症 d コイ稚魚の鰓ミクソボルス症 e 粘液胞子虫性やせ病 f 心臓ヘネガヤ症
	G 大型寄生虫性疾病	
	①単生虫	a ギロダクチルス症 b ダクチロギルス症 c シュードダクチロギルス症 d ハダムシ (ベネデニア) 症 e ヘテラキシネ症 f ビバギナ症 g ヘテロボツリウム症
	②吸虫	a 魚類住血吸虫症 b クリノストマム症 c メタゴニムス症 d 吸虫 (ガラクトソマム) 性旋回病
	③線虫	a 筋肉線虫 (フィロメトロイデス) 症 b 生殖腺線虫 (フィロメトラ) 症
	④鉤頭虫	a 頸長鉤頭虫 (ロンギコラム) 症
	⑤甲殻類	a イカリムシ症 b カリグス症 c アルグルス (チョウ・チョウモドキ) 症

大項目	中項目	小項目
	H 飼料性疾病	a ビタミン欠乏 b 必須アミノ酸欠乏 c 必須脂肪酸欠乏 d 無機塩類欠乏 e 変敗飼料
	I 環境性疾病	a 温度 b 溶存ガス量 c 溶存窒素化合物 d 農薬中毒
	J 腫瘍	a 自然発生性腫瘍 b 発癌性物質による腫瘍

IV 食品衛生

大項目	中項目	小項目
1. 食品衛生の概要	<p>A 目的、対象、範囲</p> <p>B 健康障害</p>	<p>a 食の産業化・グローバル化</p> <p>b 広域食中毒</p> <p>c 安全性</p> <p>d 品質・安全性保障システム</p> <p>e 食糧不足</p> <p>f 動物性食品</p> <p>g 獣医療と自由貿易</p> <p>a 食品によって起こる危害</p> <p>b 食品が媒体となって起こる危害</p> <p>c 身体の反応によって起こる危害</p> <p>d 食中毒</p>
2. 生体反応により生じる食品の有害性	<p>A 食物アレルギー</p> <p>B 腸内細菌叢との相互作用による食品の有害性</p> <p>C 食品の機能</p>	<p>a 定義と特徴</p> <p>b 症状と病型</p> <p>c 食物アレルギー</p> <p>d アレルギー物質を含む食品の表示</p> <p>a 腸内細菌叢と健康</p> <p>a 機能性食品と保健機能食品制度</p> <p>b 組換えDNA技術を応用した食品</p>
3. 食品における微生物制御と腐敗	<p>A 微生物汚染</p> <p>B 環境要因</p> <p>C 汚染指標微生物</p> <p>D 衛生管理</p> <p>E 品質劣化</p> <p>F 腐敗防止</p>	<p>a ミクロフローラ</p> <p>b 二次汚染</p> <p>a 温度</p> <p>b 水素イオン濃度pH</p> <p>c 酸素濃度</p> <p>d 水分〈水分活性〉</p> <p>a 一般指標細菌〈一般細菌〉</p> <p>b 糞便汚染指標〈大腸菌群、糞便系大腸菌群、大腸菌、腸内細菌科菌群〉</p> <p>c 腸球菌群</p> <p>d 低温微生物</p> <p>a 腐敗</p> <p>b 化学的变化〈変質、変敗、酸敗〉</p> <p>c 食品の鮮度、腐敗の判定</p> <p>a 加熱</p> <p>b 水分活性・pH制御</p> <p>c 冷蔵、冷凍</p> <p>d 酸素除去、ガス置換法</p> <p>e 食品添加物</p> <p>f 燻煙法</p> <p>g 紫外線・放射線照射</p>
4. 食品汚染が発生する背景とその影響	A 由来と汚染経路	<p>a 生産過程における汚染</p> <p>b 貯蔵課程における汚染</p> <p>c 製造・加工・流通・販売課程での汚染</p> <p>d 調理・消費過程での汚染</p>
5. 食中毒及び喫食により起こり得る健康障害	A 細菌による食中毒	<p>a 感染型食中毒</p> <p>b 毒素型食中毒</p> <p>c 赤痢菌</p> <p>d チフス菌</p> <p>e パラチフスA菌</p> <p>f コレラ菌</p> <p>g サルモネラ属菌</p>

大項目	中項目	小項目
		<ul style="list-style-type: none"> h 病原性大腸菌〔腸管出血性大腸菌（VT産生）を含む〕 i 腸炎ビブリオ j カンピロバクター・ジェジュニ/コリ k エルシニア・エンテロコリチカ l リステリア m ウエルシュ菌 n NAGビブリオ o セレウス菌 p ブドウ球菌 q ボツリヌス菌（乳児ボツリヌス症） r エロモナス s プレシオモナス t エシェリキア・アルバーティ u ブルセラ
	B ウイルスによる食中毒	<ul style="list-style-type: none"> a ノロウイルス b A型肝炎ウイルス、E型肝炎ウイルス、サポウイルス、アデノウイルス、ロタウイルス等
	C 寄生虫及び原虫による食中毒	<ul style="list-style-type: none"> a 回虫 b 鞭虫 c 鉤虫 d 肝蛭 e クリプトスポリジウム f サイクロスポーラ g 赤痢アメーバ h ジアルジア i 顎口虫 j 横川吸虫 k 日本海裂頭条虫 l アニサキス m クドア・セブテンブクタータ n ウェステルマン肺吸虫 o トリヒナ（旋毛虫） p 有鉤条虫 q トキソプラズマ r 無鉤条虫 s サルコシステイス・ファイエリ（サルコシスチス・フェイヤー） t マンソン裂頭条虫 u 広東住血線虫
	D 自然毒による食中毒	<ul style="list-style-type: none"> a 動物性食中毒（有毒魚、貝毒） b 植物性食中毒（毒キノコ、有毒植物）
	E 有害化学物質による食中毒	<ul style="list-style-type: none"> c 予防法 a 重金属類及びヒ素 b PCB c 有機塩素系化合物（ダイオキシン類、PCB、DDT） d 農薬 e 動物用医薬品 f 腐敗アミン（ヒスタミン等） g カビ毒（マイコトキシン） h 放射性物質

大項目	中項目	小項目
	F 食品から検出される発がん物質	a 植物成分〈サイカシン〉 b N-ニトロソ化合物〈ニトロソアミン類〉 c 熱分解生成物〈ヘテロサイクリックアミン、多環芳香族炭化水素〉 d アクリルアミド
6. 食品添加物	A 使用目的と法的規制 B 安全性評価 C ポジティブリスト制度	a 定義 b 使用目的 c 分類 d 指定 e 食品添加物公定書 f 成分規格 g 表示基準 a 毒性試験 b 無毒性量 c 一日摂取許容量〈ADI〉 d 使用基準の設定
7. 食品別衛生管理	A GHP、HACCP、GMP B 乳及び乳製品の衛生 C 食肉の衛生 D 食鳥肉の衛生 E 卵の衛生 F 魚介類の衛生 G 野菜・果物の衛生	a 乳の成分と性状 b 微生物汚染 c 理化学的物質・化学物質による汚染 d 殺菌 e 衛生管理 f 成分規格と検査法 a 食肉とその加工品の衛生上の特徴 b 食肉生産における衛生管理 c と畜場の衛生 d と畜検査〈生体検査、解体前検査、解体後検査〉 e と畜場外とさつ〈切迫とさつ、自家用とさつ〉 f 牛海綿状脳症〈BSE〉 g 腸管出血性大腸菌、サルモネラ、カンピロバクター a 鳥及び食鳥肉による人の疾病 b 食鳥肉生産における衛生管理 c 食鳥処理工程と衛生管理 d 食鳥検査〈生体検査、脱羽後検査、内臓摘出後検査〉 e 流通と消費における衛生管理 a 食品としての卵と人への健康危害 b 微生物汚染防止機構 c 品質と鮮度検査 d 生産における衛生管理 e 異常卵 f 卵のフードチェーンと各段階における衛生管理 g 卵とサルモネラ食中毒 a 鮮度保持及びその判定 b 人への健康被害 a 衛生管理 b 人への健康被害
8. 食品衛生行政	A 食品衛生行政	a 食品衛生行政の体制

大 項 目	中 項 目	小 項 目
	B 食品衛生関係法律	b 食中毒発生事の行政対応 c 食品の監視体制【輸入食品を含む。】 d 食品の表示【遺伝子組み換え食品を含む】 a 食品安全基本法 b 食品衛生法 c 検疫法 d と畜場法 e 食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律 f 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 g 食品表示法

大項目	中項目	小項目
<p>②細菌性感染症</p>	<p>ス感染症)</p> <p>AA ベネズエラウマ脳炎</p> <p>AB リッサウイルス感染症</p> <p>AC リフトバレー熱</p> <p>A ペスト</p> <p>B 結核</p> <p>C 細菌性赤痢</p> <p>D 腸管出血性大腸菌感染症</p> <p>E オウム病</p> <p>F 回帰熱</p> <p>G Q熱</p> <p>H 炭疽</p> <p>I つつが虫病</p> <p>J 日本紅斑熱</p> <p>K 鼻疽</p> <p>L ブルセラ症</p> <p>M 発しんチフス</p> <p>N 野兔病</p> <p>O ライム病</p> <p>P 類鼻疽</p> <p>Q レプトスピラ症</p> <p>R レジオネラ症</p> <p>S ロッキー山紅斑熱</p> <p>T 破傷風</p>	
<p>③真菌性感染症</p>	<p>A コクシジオイデス症</p>	
<p>④寄生虫性感染症</p>	<p>A エキノコックス症</p> <p>B アメーバ赤痢</p> <p>C クリプトスポリジウム症</p> <p>D ジアルジア症</p>	
<p>3. その他の人獣共通感染症</p> <p>①ウイルス性感染症</p>	<p>A ニューカッスル病</p> <p>B リンパ球性脈絡髄膜炎</p> <p>C 伝染性膿疱性皮膚炎</p> <p>D 牛丘疹性口内炎</p> <p>E 水疱性口内炎</p> <p>F 牛痘</p> <p>G 偽牛痘</p> <p>H ボルナウイルス感染症</p> <p>I ナイロビ羊病</p> <p>J ウェッセルスブロン病</p> <p>K 豚インフルエンザ</p> <p>L レオウイルス感染症</p> <p>M ロタウイルス感染症</p> <p>N オルフウイルス感染症</p>	
<p>②細菌性感染症</p>	<p>A 非結核性抗酸菌症</p> <p>B パスツレラ症</p> <p>C 豚丹毒 (類丹毒)</p> <p>D リステリア症</p> <p>E サルモネラ症 (非チフス性)</p> <p>F エルシニア症</p> <p>G カンピロバクター症</p> <p>H 鼠咬症</p> <p>I 仮性結核</p> <p>J 猫ひっかき病</p> <p>K 発疹熱</p>	

大項目	中項目	小項目
	L カプノサイトファーガ感染症 M ガス壊疽 N ボツリヌス症 O ブドウ球菌症 P ストレプトコッカス・スイ ス感染症 Q コリネバクテリウム・ウ ルセランス感染症	
③真菌性感染症	A クリプトコックス症 B 皮膚糸状菌症〈皮膚真菌 症〉 C ヒストプラズマ症 D ブラストミセス症 E アスペルギルス症	
④原虫性感染症	A トリパノソーマ症 B トキソプラズマ症 C バベシア症 D リーシュマニア症	
⑤蠕虫性感染症	A 肺吸虫症 B 肝吸虫症 C メタゴニムス症〈横川吸 虫症〉 D 住血吸虫症〈日本住血吸 虫症〉 E 肝蛭症 F 裂頭条虫症〈日本海裂頭条 虫症〉 G マンソン孤虫症 H 有鉤条虫症〈有鉤囊虫症〉 I 無鉤条虫症 J アジア条虫症 K 回虫類の幼虫移行症〈トキ ソカラ症、アライグマ回虫 症〉 L アニサキス症 M 広東住血線虫症 N 糞線虫症 O 顎口虫症 P 犬糸状虫症 Q 旋毛虫症〈トリヒナ症〉 R 鉤頭虫症	

VI 環境衛生

大項目	中項目	小項目
1. 自然環境及び環境衛生の概念	<p>A 環境の概念と歴史</p> <p>B 環境衛生問題と獣医学</p> <p>C 環境汚染のリスク対策</p> <p>D 環境基本法と環境基準</p> <p>E 環境影響評価</p>	<p>a 環境の概念</p> <p>b 適応と順化（馴化）</p> <p>c 環境衛生の歴史（環境汚染と環境破壊）</p> <p>d 環境問題に対する国際連携</p> <p>a 関連法規と獣医学</p> <p>a 病原微生物と化学物質による環境汚染</p> <p>b 化学物質対策</p> <p>c リスク評価（リスクアセスメント）</p> <p>d 生物モニタリング</p>
2. 生活環境（空気）	<p>A 気象</p> <p>B 空気</p>	<p>a 気象に関する指標</p> <p>b 日射、照度</p> <p>c 気圧</p> <p>d 湿度</p> <p>e 気流</p> <p>f 輻射</p> <p>g WBGT指数</p> <p>a 大気の種類と成分</p> <p>b 大気成分に起因する欠乏症及び中毒</p>
3. 生活環境（水）	<p>A 水と健康</p> <p>B 上水と水道</p> <p>C 浄水処理</p> <p>D 下水と下水道</p> <p>E 下水処理法</p> <p>F 下水・公共用水域（河川、湖沼、海域）の水質基準と水質検査</p>	<p>a 水を介した人の健康障害の特徴</p> <p>b 水系感染症</p> <p>c 有害化学物質による健康障害</p> <p>a 水道の現状</p> <p>b 原水の種類</p> <p>c 水道水の水質基準</p> <p>a 浄水処理工程（急速ろ過法、緩速ろ過法、膜ろ過、塩素処理）</p> <p>b 高度浄水処理</p> <p>c 塩素消毒（残留塩素、消毒副生物）</p> <p>a 下水及び下水道の種類</p> <p>b 下水及び下水道の現状</p> <p>c 排水基準（下水道法、水質汚濁防止法）</p> <p>a 浮遊生物法（活性汚泥法）</p> <p>b 酸化池法</p> <p>c 生物膜法</p> <p>d 嫌気性処理法</p> <p>e 三次処理（高度処理）</p> <p>f し尿浄化槽</p> <p>a 一律排水基準</p> <p>b 水質検査項目〔浮遊物質（SS）、溶存酸素（OD）、生物化学的酸素要求量（BOD）、化学的酸素要求量（COD）、n-ヘキサン抽出物、大腸菌〕</p>
4. 土壌環境の衛生	A 土壌環境	
5. 室内環境の衛生	A 室内環境	<p>a シックハウス症候群</p> <p>b ハウスダストによる呼吸器疾患及びアレルギー</p> <p>c 室内環境の基準</p>
6. 廃棄物と環境	A 廃棄物	<p>a 廃棄物の現状</p> <p>b 廃棄物対策（廃棄物処理法）</p> <p>c 廃棄物の分類（一般廃棄物、産業廃棄物、特別管理廃棄物、感染性廃棄物）</p> <p>d 放射性廃棄物対策措置法</p>

大項目	中項目	小項目
	B 廃棄物処理	a 廃棄物の処理体制〈生活系ごみと事業系ごみ、産業廃棄物管理票制度、廃棄物最終処分場〉 b 廃棄物の輸出入 c 廃棄物のリサイクル
7. 環境問題の概要	A 環境問題と国際対応	a アジェンダ21 b 気候変動枠組条約 c スtockホルム条約〈POPs条約〉 d カルタヘナ議定書 e ロッテルダム条約 f 水俣条約
8. 地球環境問題の概要	A 地球温暖化	a 温暖化の現状 b 温暖化の原因 c 温暖化の影響 d 温暖化対策〈気候変動枠組条約、カーボンニュートラル、地球温暖化対策推進法、パリ協定〉
	B オゾン層	a オゾン層とその役割 b オゾンホールとその原因 c オゾン層の保護対策〈ウィーン条約、モントリオール議定書〉
	C 酸性雨	a 酸性雨の原因 b 酸性雨の影響 c 酸性雨の現状 d 酸性雨の対策
	D 生物多様性	a 生物多様性の定義 b 生態系サービス c 生物多様性の危機 d 生物多様性の保全対策〈生物多様性条約、生物多様性基本法、名古屋議定書〉 e 絶滅危惧種とその保護〈レッドリスト、絶滅のおそれのある野生生物の種の保護に関する法律〉 f 希少種の保護〈ワシントン条約、ラムサール条約〉 g 野生動物の保護と管理〈鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律〉 h 外来種対策〈特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律〉 i その他の対応〈カルタヘナ議定書〉
	E 熱帯林の減少	a 熱帯林減少の原因と現状 b 熱帯林の保護
	F 海洋汚染	a 海洋汚染の原因と現状 b 海洋汚染対策〈マルポール条約、ロンドン・ダンピング条約、国際海洋法条約、海洋汚染防止法〉 c マイクロプラスチック
	G 砂漠化	
	H 有害廃棄物越境問題	a セベソ事件 b バーゼル条約
9. 地域の環境問題〈公害〉の概要	A 公害の歴史	a 我が国の明治期から昭和初期における環境問題 b 高度経済成長期の公害問題 c 現在の環境問題
	B 大気汚染	a 大気汚染の定義 b 大気汚染の歴史〈健康障害の事例〉 c 大気汚染物質

大項目	中項目	小項目
	C 水質汚濁	d 大気汚染対策に係る法規〈環境基本法、大気汚染防止法、その他〉 e 気温の逆転層
		a 水の自浄作用と水質汚濁 b 水質汚濁の歴史〈健康障害の事例〉 c 水質汚濁の影響〈富栄養化、赤潮、貧酸素水塊、青潮〉
	D 土壌汚染	d 水質汚濁対策に係る法規〈環境基本法、水質汚濁防止法、その他〉 e 水質汚濁の現状
		a 土壌汚染の歴史 b 土壌汚染の特徴 c 土壌汚染の現状
	E ダイオキシン類に関する環境基準	d 土壌汚染対策に係る法規〈環境基本法、農用地の土壌の汚染防止等に関する法律、農薬取締法、土壌汚染防止法、その他〉 a ダイオキシン類の種類および特徴 b ダイオキシン類による環境汚染 c ダイオキシン類に関する現状 d ダイオキシン類対策に係る法規〈ダイオキシン類対策特別措置法、その他〉
	F 騒音・振動	a 騒音・振動の概要 b 騒音・振動対策に係る法規〈環境基本法、騒音規制法、振動規制法〉
	G 地盤沈下	a 地盤沈下の概要
	H 悪臭	a 悪臭の概要 b 悪臭対策に係る法規〈悪臭防止法〉
10. 化学物質汚染対策	A 化学物質による汚染	a 環境汚染化学物質の特徴 b 残留性有機汚染物質 c 重金属とその化合物 d オゾン層破壊物質 e 環境汚染物質のリスク評価〈有害性評価、ばく露評価〉 f 化学物質管理の国際的取組み〈ロッテルダム条約、ストックホルム条約、バーゼル条約、水俣条約〉 g 我が国での化学物質管理制度〈化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律、特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律、国際条約〉
11. 放射性物質による汚染	A 放射線と放射性物質	a 放射線の種類 b 自然放射線 c 放射線の利用〈人工放射線〉
	B 放射性物質による汚染事故	a 大気圏核実験 b 原子力発電所事故
	C 放射線物質の規制と被ばくの限度	a 我が国での放射性物質規制に関わる主な法規〈原子力基本法、獣医療法・医療法、医薬品・医療機器等の品質・有効性及び安全性の確保等に関する法律、放射性同位元素等規制法、電離放射線障害防止規則〉 b 被ばく線量限度
12. 衛生動物	A 衛生動物の種類と危害	a 吸血等により病原体を媒介するもの〈カ、ノミ、シラミ、マダニ等〉 b 病原体を運ぶもの〈ハエ、ゴキブリ、ネズミ等〉 c 血液や体液を吸うもの〈カ、マダニ、トコジラミ等〉

大項目	中項目	小項目
	B 衛生動物の防除	d 刺咬や毒の注入により痛みや痒みを引き起こすもの〈カ、ノミ、アブ、毒グモ、毒毛虫、毒ヘビ等〉 e アレルギーを引き起こすもの〈コナダニ等〉 f 不快動物〈ネズミ、ハエ、ゴキブリ、ナメクジ、ムカデ、ヤスデ等〉 g 食料や衣服等を害するもの〈コクゾウムシ等〉 a 環境整備 b 物理的・機械的防除 c 化学的防除 d 生物学的防除 e 遺伝的防除

獣医学の臨床的事項

獣医師としての職能を獣医療現場で発揮する際に、求められる総合的かつ実践的な知識・技能を体系的に網羅する。

区 分	主な関連科目
I 栄養	薬理学、動物行動学、病理学、免疫学、微生物学、家禽疾病学、動物感染症学、寄生虫病学、動物衛生学、野生動物学、内科学総論、臨床病理学、臨床薬理学、呼吸循環器病学、消化器病学、泌尿生殖器病学、内分泌代謝病学、臨床栄養学、神経病学、血液免疫病学、皮膚病学、臨床行動学、外科学総論、軟部組織外科学、運動器病学、臨床腫瘍学、眼科学、画像診断学、産業動物臨床学、馬臨床学、臨床繁殖学、
II 感染症	
III 中毒	
IV 呼吸器系の疾患	
V 循環器系の疾患	
VI 消化器系の疾患	
VII 泌尿器系の疾患	
VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患	
IX 運動器系の疾患	
X 神経系の疾患	
XI 感覚器系の疾患	
XII 血液・免疫系の疾患	
XIII 内分泌・代謝系の疾患	
XIV 皮膚の疾患	
XV 乳房・乳腺の疾患	
XVI 新生子の疾患	
XVII 行動の疾患	

I 栄養

大項目	中項目	小項目
1. 栄養素の利用と代謝	A 糖質・炭水化物 B 脂質 C アミノ酸・タンパク質 D ビタミン E ミネラル	
2. 栄養状態の評価	A BCS 〈ボディコンディションスコア〉 B MCS 〈マッスルコンディションスコア〉 C 血液生化学検査	
3. 疾患と栄養管理	A 消化器疾患 B 内分泌疾患 C 泌尿器疾患 D 循環器疾患 E アレルギー性疾患 F 運動器系疾患 G その他の疾患 H 術後の栄養管理 I 重症動物の栄養管理	

II 感染症

大項目	中項目	小項目
1. ウイルス性感染症	A 口蹄疫 B 牛疫 C 水疱性口内炎 D アカバネ病 E 悪性カタル熱 F チュウザン病 G ランピースキン病 H 牛ウイルス性下痢 (BVD) I 牛伝染性鼻気管炎 J 牛伝染性リンパ腫 K アイノウイルス感染症 L イバラキ病 M 牛丘疹性口内炎 N 牛流行熱 O アデノウイルス感染症 P 牛痘 Q 偽牛痘 R 牛RSウイルス感染症 S 牛パラインフルエンザ T 牛コロナウイルス感染症 U 牛鼻炎ウイルス感染症 (旧牛ライノウイルス感染症) V 牛乳頭炎 W 牛パルボウイルス感染症 X D型インフルエンザ Y シュマレンベルクウイルス感染症 Z ピートンウイルス感染症 AA ロタウイルス感染症 AB トロウイルス感染症 AC 牛乳頭腫 AD 牛免疫不全ウイルス感染症 AE 牛アストロウイルス感染症 AF ジェンブラナ病 AG ブルータング AH リフトバレー熱 AI マエディ・ビスナ (ビスナ・マエディ) AJ 山羊関節炎・脳炎 AK 小反芻獣疫 AL 伝染性膿疱性皮膚炎 AM 羊痘 AN 山羊痘 AO ナイロビ羊病 AP 跳躍病 AQ 羊肺腺腫 AR ボーダー病 AS ウェッセルスブロン病 AT 馬伝染性貧血 AU アフリカ馬疫	

大項目	中項目	小項目
	CP 産卵低下症候群〈EDS-1976〉 CQ 鶏貧血ウイルス感染症〈鶏伝染性貧血〉 CR 鶏ウイルス性腱鞘炎/関節炎 CS 鳥(メタ)ニューモウイルス感染症 CT 細網内皮症 CU 鶏腎炎ウイルス感染症 CV 鳥のパラミクソウイルス感染症 CW あひるウイルス性腸炎 CX あひるウイルス性肝炎 CY あひるB型肝炎ウイルス感染症 CZ うずら気管支炎 DA オウム・インコ類の嘴羽毛病 DB オウム・インコ類のヘルペスウイルス感染症 DC 前胃(腺胃)拡張症候群 DD 鳥ポリオーマウイルス感染症〈セキセイインコ雛病〉 DE 七面鳥ウイルス性肝炎 DF 七面鳥コロナウイルス感染症 DG 七面鳥アストロウイルス感染症 DH がちょうパルボウイルス感染症 DI 兎粘液腫 DJ 兎線維腫 DK 兎出血病 DL 狂犬病 DM ジステンパー DN 犬パルボウイルス感染症 DO 犬ヘルペスウイルス感染症 DP 犬パラインフルエンザウイルス感染症 DQ 犬伝染性喉頭気管炎 DR 犬コロナウイルス感染症 DS 犬伝染性肝炎 DT 犬インフルエンザ DU 犬ウイルス性乳頭腫症〈犬口腔乳頭腫〉 DV 犬呼吸器コロナウイルス感染症 DW 新型コロナウイルス感染症〈COVID-19〉 DX 猫白血病ウイルス感染症 DY 猫免疫不全ウイルス感染症 DZ 猫汎白血球減少症〈猫パルボウイルス感染症〉 EA 猫ウイルス性鼻気管炎 EB 猫カリシウイルス感染症	b 心膜水腫性症候群 c アデノウイルス性筋胃びらん

大項目	中項目	小項目
	EC 猫コロナウイルス感染症 ED 猫よろよろ病 EE 猫ヘパドナウイルス感染症 EF 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) EG 猫モルビリウイルス感染症 EH ミンクアリュージョン病 (ア リュージョンミンク病) EI ミンク腸炎ウイルス感染症	a 猫伝染性腹膜炎 b 猫腸コロナウイルス感染症 a ボルナウイルス感染症 b ルストラウイルス感染症
2. 細菌性感染症	A 炭疽 B 出血性敗血症 C ブルセラ症 D 結核 E ヨーネ病 F 牛肺疫 G 気腫疽 H レプトスピラ症 I サルモネラ症 J 牛カンピロバクター症 K パスツレラ症 L 悪性水腫 M エンテロトキセミア N ボツリヌス症 (中毒) O 大腸菌症 P 壊死桿菌症 Q リステリア症 R 血栓塞栓性髄膜脳炎脊髄 炎 (ヒストフィルス・ソムニ 症) S 伝染性角結膜炎 (ピンクア イ) T 放線菌症 U 牛アクチノバチルス症 V 乳頭状趾皮膚炎 W デルマトフィルス症 X Q熱 Y マイコプラズマ肺炎 (牛、豚) Z 鼻疽 AA 類鼻疽 AB 破傷風 AC 馬伝染性子宮炎 AD 馬パラチフス AE ロドコッカス・エクイ症 AF 腺疫 AG 萎縮性鼻炎 AH 豚丹毒 AI 豚赤痢 AJ 豚胸膜肺炎 AK グレーサー病 AL 豚レンサ球菌症 AM 滲出性表皮炎 (スス病) AN 腸腺腫症候群 AO トウルエペレラ・ピオゲネス 症	a 腸管毒素原生大腸菌感染症 b 豚大腸菌症・浮腫病 (豚) a 肝膿瘍/趾間爛

大項目	中項目	小項目
	AP 豚のブドウ球菌症 AQ 豚抗酸菌症 AR 豚のエルシニア症 AS 豚のマイコプラズマ症 AT 増殖性腸炎〈馬・豚〉 AU アナプラズマ症 AV 流行性羊流産 AW 家きんコレラ AX 家きんのサルモネラ症〈ひな 白痢、家きんチフス〉 AY 鳥結核病 AZ 鳥マイコプラズマ症〈家きん の呼吸器性マイコプラズマ 症、家きんのマイコプラズマ滑 膜炎〉 BA 鶏のブドウ球菌症 BB 家きんのクロストリジウム症 BC 伝染性コリーザ BD オウム病 BE 鶏のカンピロバクター症 BF ライム病 BG ヘモプラズマ症 BH クラミジア症 BI エールリヒア症 BJ ミンク出血性肺炎	a 壊死性腸炎 b 壊疽性皮膚炎 c ボツリヌス症 d 潰瘍性腸炎（うずら病）
3. 真菌性感染症	A 皮膚糸状菌症 B カンジダ症 C アスペルギルス症 D ムーコル症 E 仮性皮疽 F 顆粒性皮膚炎 G クリプトコックス症 H ヒストプラズマ症 I マラセチア皮膚炎 J ニューモシスチス症 K エンセファリトゾーン症	
4. 原虫性感染症	A ジアルジア症 B トリコモナス症 C トリパノソーマ症 D リーシュマニア症 E ヒストモナス症〈黒頭病〉 F ヘキサミタ症 G コクシジウム症 H クリプトスポリジウム症 I トキソプラズマ症 J ネオスポラ症 K 住肉胞子虫症〈サルコシスチ ス症〉 L ロイコチトゾーン症 M 鶏マラリア N ヘパトゾーン症 O ピロプラズマ症〈バベシア	a トリコモナス病〈生殖器トリコモナス症〉 b 腸トリコモナス症 a アイメリア症 b シストイソスポーラ症〈イソスポラ症〉

大項目	中項目	小項目
	症、タイレリア症) P バランチジウム症	
5. 蠕虫性感染症		
①吸虫	A 肝蛭症 B 双口吸虫症 C 脾蛭症 D 槍形吸虫症 E 壺形吸虫症 F 棘口吸虫症 G 肺吸虫症 H 肝吸虫症 I 横川吸虫症 J 日本住血吸虫症	
②条虫	A マンソン裂頭条虫症 B 葉状条虫症 C 大条虫症 D 乳頭条虫症 E ベネデン条虫症 F 拡張条虫症 G 瓜実条虫症 H メソセストイデス属条虫症 (有線条虫症等) I 胞状条虫症 J 猫条虫症 K 多頭条虫症 L 単包条虫症 M 多包条虫症 N 有鉤条虫症 O アジア条虫症 P 無鉤条虫症 Q 小形条虫症 R 縮小条虫症 S 日本海裂頭条虫症 T 方形条虫症 U 有輪条虫症 V 棘溝条虫症	
③線虫	A 回虫症 B 蟯虫症 C 円虫症 D 毛様線虫症 E 腸結節虫症	a 犬回虫症 b 猫回虫症 c 豚回虫症 d 牛回虫症 e 馬回虫症 f 鶏回虫症 g 犬小回虫症 a 馬蟯虫症 b 鼠大腸蟯虫症 c 鼠盲腸蟯虫症 a 馬円虫症 b 普通円虫症 c 無齒円虫症 a 捻転胃虫症 b 牛捻転胃虫症 c オステルターグ胃虫症 d クーペリア症 e トリコストロンギルス症 f ネマトジルス症 a 牛腸結節虫症 b コロンビア結節虫症

大項目	中項目	小項目	
④鉤頭虫	F 鉤虫症	c 豚腸結節虫症 a 犬鉤虫症 b 猫鉤虫症	
	G 肺虫症	c 牛鉤虫症 a 牛肺虫症 b 糸状肺虫症 c 豚肺虫症 d 犬肺虫症	
	H 開嘴虫症	a 気管開嘴虫症	
	I 腎虫症	a 腎虫症 b 豚腎虫症	
	J 糞線虫症	a 糞線虫症 b 猫糞線虫症 c 乳頭糞線虫症	
	K 眼虫症	a ロデシア眼虫症 b 東洋眼虫症	
	L 食道虫症	a 血色食道虫症 b 美麗食道虫症	
	M 胃虫症	a 大口馬胃虫症 b 小口馬胃虫症 c ハエ馬胃虫症 d 猫胃虫症	
	N 顎口虫症	a 有棘顎口虫症 b 剛棘顎口虫症 c ドロレス顎口虫症 d 日本顎口虫症	
	O 糸状虫症	a 犬糸状虫症 b パラフィラリア症 c 指状糸状虫症 d 脳脊髄セタリア症 e 溷睛虫症 f 沖縄糸状虫症〈鼻鏡白斑症〉 g 咽頭糸状虫症 h 頸部糸状虫症	
	P 鞭虫症	a 犬鞭虫症 b 豚鞭虫症 c 牛鞭虫症	
	Q 毛細線虫症	a 家禽・犬・猫の毛細線虫症 b 肝毛細線虫症	
	R 鶏盲腸虫症		
	S 旋毛虫症〈トリヒナ症〉		
	A 鉤頭虫症		
	6. 節足動物寄生症	A マダニ症 B 鶏ダニ症 C ハイダニ症 D ツメダニ症 E 疥癬 F 毛包虫症 G シラミ症 H ハジラミ症 I ノミ症 J 牛バエ幼虫症 K 馬バエ幼虫症 L 羊バエ幼虫症 M ツツガムシ症 N シラミバエ症	a 疥癬〈ヒツジキュウセンヒゼンダニ症〉 b 穿孔ヒゼンダニ症

大項目	中項目	小項目
	O サシバエ症 P ノサシバエ症 Q アブ症 R ブユ症 S ヌカカ症	
7. プリオン性感染症	A 伝達性海綿状脳症〔牛海綿状脳症（BSE）、羊・山羊のスクレイピー、鹿慢性消耗病（CWD）〕	

III 中毒

大項目	中項目	小項目
1. 植物・飼料による中毒	A ワラビ中毒《牛、馬》	a 腫瘍性血尿症（乳頭性膀胱炎）
	B スイートクローバー中毒	a レンゲツツジ
	C ツツジ科植物中毒	b アセビ
		c ネジキ
		d シャクナゲ
		e ハナヒリノキ
	D ユズリハ中毒	a タマネギ
	E ネギ中毒	b ネギ
		c ニラ
		d ニンニク
	F 蛍光植物中毒〈光線過敏症〉	a ソバ
		b パセリ
		c クローバー
	G アルカロイド中毒	a ユズリハ
		b トリカブト
	H 苦味質中毒	a ドクセリ
	I キョウチクトウ属	b シキミ
	J アブラナ科	
	K ドングリ	
	L オナモミ	
	M その他の植物中毒	a チョウセンアサガオ
		b バイケイソウ
		c ソテツ
		d ドクウツギ
		e ヤツデ
		f キキョウ
		g サツマイモ
	h スイートクローバー	
	i オトギリソウ	
	j ソバ	
	k ジャガイモ	
	N 硝酸塩中毒	
	O 尿素中毒	
	P エンドファイト中毒	
	Q 一年生ライグラス中毒	
	R 食塩中毒	
	S 製造粕による中毒	a 綿実油粕
		b ナタネ油粕
		c 醤油粕
	T マイコトキシン中毒	a アフラトキシン
		b ゼアラレノン
		c デオキシニバレノール
		d フモニシン
	U 魚粉中毒	
	V 青酸中毒	
	W シュウ酸中毒	
2. 農薬・化学物質による中毒	A 有機リン剤中毒	
	B カーバメイト剤中毒	
	C ピレスロイド剤中毒	
	D 有機フッ素剤中毒	
	E 有機塩素剤中毒	

大項目	中項目	小項目
	F ヒ素中毒 G 銅中毒 H モリブデン中毒 I 石炭酸中毒 J クマリン系殺鼠剤中毒 K 除草剤中毒 L 鉛中毒 M 水銀中毒	 a ワルファリン中毒 a ジクワット剤中毒 b パラコート中毒

IV 呼吸器系と胸腔・胸膜の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 鼻・副鼻腔の疾患	A 鼻の外傷 B 鼻出血 C 副鼻腔炎 D 鼻炎 E 鼻腔内腫瘍 F 副鼻腔蓄膿症	a 細菌性鼻炎 b ウイルス性鼻炎 c 真菌性鼻炎 d アレルギー性鼻炎 e 歯牙疾患による鼻炎 f リンパ球形質細胞性鼻炎
2. 咽喉頭の疾患	A 喉頭炎 B 喉嚢炎 C 気嚢炎 D 喉頭麻痺 E 短頭種気道症候群 F 咽頭炎 G 軟口蓋背方変位 H 喉頭蓋エントラップメント I 咽頭虚脱 J 喉頭蓋下嚢胞	a 喘鳴症《馬》 a 外鼻孔狭窄 b 軟口蓋過長症 c 気管低形成 d 喉頭虚脱
3. 気管・気管支の疾患	A 気管損傷 B 気管炎 C 気管支炎 D 気管支拡張症 E 気管気管支軟化症 F 気管狭窄 G 気管内異物 H 再発性気道閉塞 I 気管腫瘍	a 犬伝染性気管気管支炎 b 猫喘息
4. 肺の疾患	A 肺水腫 B 肺炎 C 牛呼吸器病症候群〈BRDC〉 D 肺出血〈喀血〉 E 肺気腫 F 肺葉捻転 G 肺(血管)血栓塞栓症 H 肺膿瘍 I 肺腫瘍 J 肺高血圧症	a 心原性肺水腫 b 非心原性肺水腫 a 細菌性肺炎 b ウイルス性肺炎 c 真菌性肺炎 d 寄生虫性肺炎 e 好酸球性気管支肺炎 f 吸引性〈誤嚥性〉肺炎 g 間質性疾患 h 気管・気管支肺炎 a 原発性肺腫瘍 b 転移性肺腫瘍

大項目	中項目	小項目
5. 胸膜・縦隔・胸腔の疾患	A 損傷 B 胸膜炎 C 胸水（症） D 気胸 E 縦隔気腫 F 腫瘍	a 漏出性 b 変性漏出性 c 滲出性 d 膿胸 e 乳び胸 f 血胸 g 腫瘍性 a 中皮腫 b リンパ腫 c 胸腺腫

V 循環器系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 心膜の疾患	A 心膜炎 B 心膜水腫 C 心膜血腫 D 腹膜心膜横隔膜ヘルニア E 心膜の腫瘍 F 特発性心膜液貯留	a 外傷性心膜炎 b 感染性心膜炎 c 特発性（出血性）心膜炎 d 収縮性心膜炎
2. 心臓の疾患	A 先天性心疾患 B 後天性弁膜疾患 C 心不全 D 肺高血圧症 E 不整脈と異常心電図 F 心筋疾患 G 犬糸状虫症 H 細菌性心内膜炎 I 腫瘍 J ブロイラーの腹水症	a 心房中隔欠損（卵円孔開存・卵円孔欠損） b 心室中隔欠損 c 動脈管開存 d ファロー四徴症 e 肺動脈狭窄 f 大動脈狭窄 g 僧帽弁異形成 h 三尖弁異形成 i アイゼンメンガー症候群 j 右大動脈弓遺残症 k 両大血管右室起始 a 粘液腫様変性 b 感染性心内膜炎 a 刺激生成異常 b 刺激伝導異常 c 心室間あるいは心室内刺激伝導異常 d ST-Tの異常 a 拡張型心筋症 b 肥大型心筋症 c 拘束型心筋症 d 不整脈源性右室心筋症 e 分類不能型心筋症 f 心筋炎
3. 血管の疾患	A 血管の損傷 B 血栓症 C 塞栓症 D 動脈瘤 E 動脈破裂 F 動脈硬化症 G 静脈瘤 H 静脈周囲炎 I 血管炎 J 腫瘍	a 牛の後大静脈血栓症 a 肺血栓塞栓症 b 動脈血栓塞栓症 a 寄生虫性動脈瘤《馬》 a 大動脈破裂《馬》 b 子宮動脈破裂《馬》 a 動脈内膜炎《馬》

大項目	中項目	小項目
4. リンパ系の疾患	A リンパ節炎〈リンパ腺炎〉 B リンパ管炎 C リンパ腫	a 牛伝染性リンパ腫（地方病型・散発型[子牛型・胸腺型・皮膚型]） b リンパ肉腫

VI 消化器系と腹腔・腹膜の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 口腔・咽頭の疾患	A 先天性口腔鼻腔瘻 B 後天性口腔鼻腔瘻 C 口腔・舌の炎症 D 口腔内異物 E 口腔内腫瘍 F 舌の損傷	a 硬口蓋裂 b 軟口蓋裂 c 口唇裂 a 潰瘍 a 悪性黒色腫〈メラノーマ〉 b 扁平上皮癌 c 線維肉腫 d エプーリス
2. 歯・下顎の疾患	A 発生異常 B 交換異常〈脱換異常〉 C 過剰歯 D 歯列・摩耗異常 E う歯 F 歯周病 G 歯槽骨膜炎 H 歯瘻	
3. 唾液腺の疾患	A 耳下腺炎 B 唾液腺瘻 C 唾液性粘液瘤	
4. 食道の疾患	A 食道梗塞 B 食道狭窄 C 血管輪異常 D 巨大食道症 E 食道拡張 F 食道憩室 G 食道破裂・穿孔 H アカラシア I 食道炎 J 腫瘍 K 食道麻痺	
5. 反芻胃の疾患	A 第一胃鼓脹症 B 第一胃食滞 C 第一胃アシドーシス D 第一胃アルカローシス 〈第一胃腐敗症〉 E 第一胃錯角化症 F 迷走神経性消化不良 G 創傷性第二胃横隔膜炎 H 第三胃炎 I 第三胃食滞 J 第四胃炎 K 第四胃潰瘍 L 第四胃食滞 M 第四胃変位 N 第四胃捻転 O 第四胃拡張症《子牛》	a 急性 b 慢性 a 急性 b 亜急性 a 左方変位 b 右方変位
6. 単胃の疾患	A 胃内異物 B 胃炎	a 急性

大項目	中項目	小項目
	C 急性胃拡張（過食症） D 胃穿孔、胃破裂 E 胃捻転 F 胃拡張・捻転症候群 G 胃潰瘍 H 胃の腫瘍 I 幽門狭窄 J 噴門狭窄	b 慢性
7. 腸の疾患	A 腸閉塞・狭窄 B 腸重積 C 腸捻転 D 腸の変位 E 腸の穿孔・破裂 F 腸石症 G 腸内異物 H 腸気泡症 I 盲腸便秘 J 盲腸拡張・捻転 K 結腸鼓脹症 L 巨大結腸症 M 直腸憩室 N 腸炎 O X大腸炎 P 出血性腸症候群 Q カタル性腸痙攣（痙攣症） R 慢性腸症 S 吸収不良症候群 T 蛋白漏出性腸症 U 十二指腸潰瘍 V 直腸脱 W 消化管好酸球性硬化性線維増殖症 X 腫瘍 Y 直腸ポリープ Z 疝痛 AA 腸閉塞	a 結腸/盲腸（風気症） a 細菌性腸炎 b ウイルス性腸炎 c 真菌性腸炎 d 寄生虫性腸炎 a 食餌反応性腸症 b 抗菌薬反応性腸症 c 免疫抑制薬反応性（特発性）腸症 a リンパ管拡張症 a 消化器型リンパ腫 b 腺腫、腺癌 c 平滑筋腫、平滑筋肉腫 a 炎症性結直腸ポリープ
8. 肛門の疾患	A 鎖肛 B 直腸腔瘻 C 肛門嚢炎 D 肛門周囲瘻 E 肛門周囲の腫瘍 F 肛門脱	a 肛門周囲腺腫 b 肛門嚢腺癌
9. 肝臓・胆道・膵臓の疾患	A 肝臓の損傷 B 肝炎 C 中毒性肝障害 D 栄養性肝障害 E 肝膿瘍	a 急性肝炎 b 慢性肝炎

大項目	中項目	小項目
	F 肝線維症、肝硬変 G 肝リポドーシス〈脂肪肝〉 H うっ血肝 I 結節性過形成 J 肝臓の腫瘍 K 門脈体循環シャント L 原発性門脈低形成 M 門脈高血圧症 N 胆石症、胆泥症 O 胆嚢炎 P 胆嚢粘液嚢腫 Q 胆管閉塞 R 胆嚢及び胆管の腫瘍 S 胆管炎、胆管肝炎 T 膵臓の損傷 U 膵臓の腫瘍 V 急性膵炎 W 慢性膵炎 X 膵外分泌不全症	a 肥満牛症候群 b 馬の高脂血症
10. 腹腔・腹膜の疾患	A 非開放性損傷 B 開放性損傷 C 腹膜炎 D 腹壁ヘルニア E 臍ヘルニア F 横隔膜ヘルニア G 腹膜心膜横隔膜ヘルニア H 食道裂孔ヘルニア I 網嚢孔ヘルニア J 鼠径ヘルニア K 大腿ヘルニア L 会陰ヘルニア M ヘルニア嵌頓 N 臍炎、臍瘻 O 急性腹症 P 腫瘍	a 中皮腫

VII 泌尿器系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 腎臓の疾患	A 腎臓の損傷 B 腎臓の先天異常 C 萎縮腎 D 腎膿瘍 E 腫瘍 F 腎炎 G 腎不全 H 急性腎障害 I 慢性腎臓病 J 腎石症〈腎臓結石〉 K 水腎症 L 尿毒症 M ファンコニー症候群 O 嚢胞腎 P 蛋白漏出性腎症	a 嚢胞腎 b 腎低形成 c 腎異形成 a 腎硬化症 a 糸球体腎炎〈ネフローゼ症候群〉 b 尿細管腎炎 c 腎盂腎炎 d 化膿性腎炎 e 間質性腎炎 a 急性 b 慢性
2. 尿管の疾患	A 尿管破裂 B 尿管結石 C 異所性尿管 D 尿管栓塞 E 尿管炎	
3. 膀胱の疾患	A 膀胱炎 B 膀胱結石症〈尿石症〉 C 膀胱破裂 D 膀胱麻痺 E 膀胱脱出 F 腫瘍 G 膀胱憩室	
4. 尿道の疾患	A 尿道の損傷 B 尿道結石症 C 尿道閉塞 D 尿道炎 E 腫瘍 F 猫下部尿路疾患〈FLUTD〉 G 尿路感染症	
5. 排尿障害	A 神経性排尿障害 B 非神経性排尿障害 C 排尿筋アトニー	

VIII 繁殖障害と生殖器系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 雄の交尾障害と生殖障害	A 交尾不能症 B 交尾欲減退症・欠如症 C 生殖不能症 D 夏季不妊症	a 無精液症 b 無精子症 c 精子減少症 d 精子無力症 e 精子死滅症 f 血精液症 g 膿精液症
2. 精巣・精巣上体・精管の疾患	A 先天異常 B 精巣変性 C 精巣炎 D 精巣の腫瘍 E 精液瘤 F 精子肉芽腫 G 精巣上体炎 H 精管炎	a 無精巣症、単精巣症 b 潜在精巣〈停留精巣、陰辜〉 c 精巣逸所症 d 精巣発育不全 e 雄性間性 f 染色体異常 a ライディッヒ細胞腫〈間細胞腫〉 b 精上皮腫 c セルトリ細胞腫
3. 副生殖腺の疾患	A 精嚢腺炎 B 前立腺炎、前立腺膿瘍 C 前立腺肥大症、前立腺嚢胞 D 前立腺腫瘍	
4. 包皮・陰茎・陰嚢の疾患	A 包皮の損傷 B 包皮小帯遺残 C 陰茎の変位 D 陰茎白膜の損傷 E 陰茎の腫瘍 F 陰茎強直症 G 陰嚢水腫・血腫 H 陰嚢炎 I 陰嚢ヘルニア	
5. 雌の生殖器の先天異常	A 染色体異常 B フリーマーチン C 間性 D 中腎傍管の部分的形成不全 E 中腎傍管の隔壁遺残	
6. 陰門・膣前庭・膣の異常と疾患	A 陰門狭窄 B 膣狭窄 C 膣嚢胞〈膣嚢腫〉 D 尿膣 E 気膣 F 膣炎 G 顆粒性陰門膣炎 H 膣脱〈膣過形成〉 I 膣の腫瘍	
7. 子宮・卵管の疾患	A 子宮頸管狭窄 B 子宮頸管炎	

大項目	中項目	小項目
	C 子宮内膜炎 D 子宮蓄膿症 E 子宮粘液症、子宮水症 F 子宮炎〈子宮筋炎〉 G 子宮外膜炎 H 子宮の腫瘍 I 卵管炎 J 卵管閉塞 K 卵管水腫 L 卵管蓄膿症 M 卵管采、卵管漏斗、卵巣囊の癒着	
8. 卵巣の疾患	A 卵胞発育障害 B 排卵障害 C 卵巣嚢腫 D 黄体形成不全 E 黄体遺残 F 卵巣炎、卵巣癒着 G 卵巣腫瘍	a 卵巣発育不全 b 卵巣静止 c 卵巣萎縮 a 排卵遅延 b 無排卵 a 卵胞嚢腫 b 黄体嚢腫 a 発育不全黄体 b 嚢腫様黄体 a 顆粒膜細胞腫 b 未分化胚細胞腫
9. リピートブリーディング	A リピートブリーディング	a 受精障害 b 胚死滅
10. 妊娠期の異常	A 流産、早産、死産 B 長期在胎 C 腔脱 D 子宮捻転 E 子宮ヘルニア	a 細菌性 b ウイルス性 d 真菌性 e 原虫性 f クラミジア性 g 非感染性
11. 胎子の異常	A 胎膜水腫 B 水頭症 C 腹水症 D 水腫胎 E 胎子死 F 胎子の奇形・先天異常	a 羊膜水腫 b 尿膜水腫 a 胎子ミイラ変性 b 胎子浸漬 c 気腫胎
12. 分娩の異常、難産	A 陣痛の異常 B 産道の異常 C 胎子過大 D 胎子の失位	a 陣痛微弱 b 子宮無力症 c 強陣痛 a 陰門狭窄 b 腔狭窄 c 頸管狭窄 d 骨盤狭窄 a 胎位異常 b 胎向異常 c 胎勢異常

大項目	中項目	小項目
	E 胎子の奇形	
13. 分娩後の疾患	A 産道の損傷 B 子宮脱 C 胎盤停滞〈後産停滞〉 D 産褥性子宮炎 E 悪露停滞症 F 産褥熱 G 分娩後乳汁分泌異常症候群 〈子宮炎－乳房炎－無乳症症候群〉 H 乳熱〈産褥麻痺〉 I ダウナー牛症候群〈産前・産後起立不能症〉 J 産褥痙攣〈産褥性硬直、産後急痛〉 K 膀胱反転・膀胱脱出	

IX 運動器系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 筋肉の疾患	A 損傷 B 筋炎 C 先天異常 D ミオパシー E 筋の萎縮 F 筋の拘縮 G 腫瘍 H 白筋症 I 重症筋無力症 J 麻痺性筋色素尿（血）症 《牛、馬》	a 多発性筋炎 b 好酸球性筋炎 a 神経原性筋疾患 b 筋原性筋疾患
2. 腱の疾患	A 腱炎 B 腱断裂 C 腱鞘炎	
3. 関節の疾患	A 関節炎 B 腫瘍 C 捻挫 D 脱臼 E 関節の拘縮・硬直 F 変形性関節症〈骨関節症〉 G 離断性骨軟骨症〈離断性骨軟骨炎〉 H 上腕二頭筋腱滑膜炎 I 肘関節形成不全〈肘異形成〉 J 前十字靭帯断裂 K 後十字靭帯断裂 L 側副靭帯断裂 M 半月損傷 N 股関節形成不全〈股異形成〉 O 虚血性大腿骨頭壊死（レッグ・カルベ・ペルテス病） P 骨軟骨異形成症	a 特発性多発性関節炎 b 関節リウマチ c 感染性関節炎 a 肩関節脱臼 b 肘関節脱臼 c 成長板 d 膝蓋骨内方脱臼 e 股関節脱臼 a 内側鉤状突起離断 b 肘突起癒合不全
4. 滑液胞の損傷	A キ甲腫 B 肘腫 C 膝瘤	
5. 骨折	A 骨折の分類 B 骨折の治癒機転 C 整復・固定法 D 骨移植	a 開放骨折 b ソルターハリス分類 c 成長板骨折 a 軟骨内骨化 b 骨膜内骨化 c 仮骨 a 外固定 b 内固定 a 皮質骨移植

大項目	中項目	小項目
		b 海綿骨移植
6. その他の骨の疾患	A 骨の炎症 B 腫瘍 C 発育異常 D ハイエナ病 E 骨粗鬆症 F 線維性骨異栄養症 G (肺性) 肥大性骨症 H 頭蓋下顎骨症	a 骨膜炎 b 骨髄炎 c 汎骨炎 d 外骨症〈骨瘤〉 a 原発性骨腫瘍 b 転移性骨腫瘍
7. 蹄・爪の疾患	A 釘傷 B 踏創 C 蹄血斑・挫跖 D 蹄球炎 E 蹄皮炎 F 趾間腐爛 G 裂蹄 H 白帯裂〈白線裂〉 I 蟻洞 J 蹄叉腐爛 K 蹄葉炎 L 蹄球びらん M 蹄底潰瘍 N 筋囊炎 O 蹄関節炎 P 爪の疾患 Q 趾皮膚炎 R 白帯病 (白線病) S 趾間過形成 T 蹄膿瘍	

大項目	中項目	小項目
	J 椎間板脊椎炎 K 脊髄梗塞 L 脊髄軟化症 M 変性性脊髄症 N 椎体膿瘍/脊柱管膿瘍 O 脳脊髄変性症《馬》	a 線維軟骨塞栓症
3. 末梢神経系の疾患	A 脳神経疾患 B 末梢神経損傷 C 炎症 D 変性 E 腫瘍 F 痙攣性不全麻痺	a 前庭障害〈捻転斜頸〉 b 三叉神経麻痺 c 顔面神経麻痺 d 聴覚障害 a 坐骨神経麻痺 b 閉鎖神経麻痺 a 多発性神経根神経炎《犬》

XI 感覚器系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 眼の疾患	<p>A 眼瞼・第三眼瞼の疾患</p> <p>B 眼窩・鼻涙系・結膜の疾患</p> <p>C 強膜炎</p> <p>D 角膜の疾患</p> <p>E ぶどう膜の疾患</p> <p>F 水晶体の疾患</p> <p>G 硝子体疾患</p> <p>H 緑内障</p> <p>I 眼底の疾患</p> <p>J 眼の腫瘍</p>	<p>a 眼瞼裂傷</p> <p>b 眼瞼炎</p> <p>c 眼瞼内反症・外反症</p> <p>d 睫毛異常</p> <p>e 第三眼瞼腺脱出〈チェリーアイ〉</p> <p>a 眼球突出</p> <p>b 鼻涙管狭窄</p> <p>c 乾性角結膜炎</p> <p>d 結膜炎</p> <p>a 強膜炎</p> <p>a 角膜穿孔</p> <p>b 角膜炎</p> <p>c 角膜潰瘍</p> <p>d デスメ瘤</p> <p>e 角膜ジストロフィー</p> <p>f 乾性角結膜炎</p> <p>a ぶどう膜・皮膚症候群〈フォークト・小柳・原田様疾患〉</p> <p>a 白内障</p> <p>b 水晶体脱臼</p> <p>a 第一次硝子体過形成遺残</p> <p>a 先天性緑内障</p> <p>b 原発緑内障</p> <p>c 続発性緑内障</p> <p>a 網膜剥離</p> <p>b 視神経炎</p> <p>c 進行性網膜萎縮</p> <p>d 突発性後天性網膜変性</p> <p>e コリー眼異常</p> <p>a 虹彩・毛様体腫瘍</p> <p>b 眼瞼腫瘍</p> <p>c 角膜扁平上皮癌</p> <p>d 類皮腫</p> <p>e リンパ腫</p>
2. 耳の疾患	<p>A 耳血腫</p> <p>B 外耳炎</p> <p>C 中耳炎</p> <p>D 内耳炎</p> <p>E 耳道腫瘍</p> <p>F 聴覚障害</p>	

XII 血液・免疫系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 赤血球系の疾患	A 溶血性貧血 B 失血性貧血 C 赤血球産生障害による貧血 D 赤血球増加症 E 先天性赤血球異常症	a 感染性 b 免疫介在性 c 先天性 d 薬物性・中毒性 e 欠乏性 a 欠乏性 b 内分泌疾患 c 腎性 d 慢性疾患に伴う貧血 e 骨髄疾患 f 薬物性・中毒性 g 感染
2. 白血球系の疾患	A 白血球増加症・減少症 B 好中球機能異常症 C リンパ球及び免疫組織の異常による疾患	
3. 骨髄の疾患	A 骨髄低形成・無形成 B 赤芽球癆 C 非再生性免疫介在性貧血 D 骨髄異形成症候群 E 骨髄線維症 F 骨髄壊死	
4. 凝固系疾患	A 一次止血の異常 B 二次止血の異常 C 播種性血管内凝固 D 血栓塞栓症	
5. リンパ造血器腫瘍	A リンパ腫 B 白血病 C 形質細胞腫瘍 D 組織球由来腫瘍 E 肥満細胞腫 F 慢性骨髄増殖性疾患	a 急性 b 慢性 a 多発性骨髄腫 b 髄外性形質細胞腫 c 猫の骨髄腫関連疾患
6. 免疫不全	A 先天性免疫不全 B 後天性免疫不全	
7. 脾臓の疾患	A 脾腫 B 結節性過形成 C 脾梗塞 D 腫瘍 E 捻転	
8. 胸腺の疾患	A 胸腺腫	

XIII 内分泌・代謝系の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 下垂体の疾患	A 尿崩症 B 下垂体機能亢進症〈先端肥大症〉 C 下垂体機能低下症〈下垂体性矮小症〉	a 中枢性尿崩症 b 腎性尿崩症 c 下垂体腺腫
2. 甲状腺の疾患	A 甲状腺機能亢進症 B 甲状腺機能低下症 C 甲状腺の腫瘍 D 甲状腺炎	a ヨード欠乏症
3. 上皮小体の疾患	A 上皮小体機能亢進症 B 上皮小体機能低下症	
4. 副腎の疾患	A 副腎皮質機能亢進症〈クッシング症候群〉 B 高アルドステロン症 C 副腎皮質機能低下症 D 副腎の腫瘍	a 馬のクッシング病（下垂体中葉機能不全・下垂体依存性副腎皮質機能亢進症） a 副腎皮質の腫瘍 b 副腎髄質の腫瘍
5. 膵臓の疾患	A インスリノーマ B 糖尿病 C 糖尿病性ケトアシドーシス D ガストリノーマ E グルカゴノーマ	
6. 性腺の疾患	A エストロゲン過剰症	
7. ビタミンの代謝障害	A ビタミンA欠乏症・過剰症 B ビタミンB群欠乏症 C ビタミンC欠乏症 D ビタミンD欠乏症・過剰症 E ビタミンE〈トコフェロール〉欠乏症【セレン欠乏症を含む。】 F ビタミンK欠乏症	a 夜盲症/筋間水腫 b ハイエナ病 a ビタミンB1欠乏症（大脳皮質壊死症/馬のワラビ中毒） a 壊血病 a くる病/骨軟化症 a 白筋症（栄養性筋ジストロフィー） b マルベリー心臓病《豚》
8. 無機物の代謝障害	A 低リン血症 B 低マグネシウム血症 C 低カルシウム血症	a 骨軟化症、くる病 a グラステタニー b 子牛の低マグネシウム血症性テタニー c 反芻動物の輸送テタニー
9. 微量元素の欠乏症	A コバルト欠乏症〈くわず病〉 B 銅欠乏症 C 鉄欠乏症 D 亜鉛欠乏症 E マンガン欠乏症 F ヨウ素欠乏症〈単純性甲状腺腫〉	
10. タンパク質の代謝障害	A 低タンパク血症 B 高タンパク血症	
11. 糖質・脂質の代謝障害	A ケトーシス《牛》 B 脂肪肝〈肥満牛症候群〉 C 肥満症 D 黄色脂肪症 E 汎脂肪織炎〈猫の黄色脂肪	

大項目	中項目	小項目
	症) F 脂肪壊死症 G 高脂血症 H 低血糖症 I 妊娠中毒《羊》	
12. 尿酸代謝異常	A 尿酸塩沈着〈痛風〉	
13. 水・電解質の代謝異常	A 脱水症 B 浮腫 C 酸塩基平衡の異常 D 血清電解質の異常 E 子牛の水中毒	
14. その他	A 熱射病〈日射病〉 B 寒冷感作	

XIV 皮膚の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 感染性皮膚疾患	A 細菌性 B ウイルス性 C 真菌性 D 寄生虫性	a 膿皮症〈表在性、深在性〉 a 皮膚糸状菌症 b カンジダ症 c マラセチア皮膚炎 d クリプトコックス症 e スポロトリコーシス a 吸血昆虫による皮膚疾患 b ダニによる皮膚疾患 c 牛バエ幼虫症 d その他吸血昆虫による皮膚疾患
2. アレルギー性・免疫介在性疾患	A アレルギー性皮膚疾患 B 免疫介在性皮膚疾患	a アトピー性皮膚炎 b 食物アレルギー c ノミアレルギー性皮膚炎 d 接触性皮膚炎 a 天疱瘡 b エリテマトーデス c 多型紅斑 d 無菌性結節性脂肪織炎
3. 栄養・内分泌皮膚疾患	A 内分泌性脱毛症 B 皮膚石灰沈着症	a 犬の甲状腺機能低下症 b 犬の副腎皮質機能亢進症 c 犬の性ホルモン関連性脱毛症
4. 先天性皮膚疾患	A 脂腺炎 B エーラス・ダンロス症候群	
5. 脱毛症	A 脱毛症	a 淡色被毛脱毛症〈黒色被毛毛包形成異常症〉 b 休止期毛包停止状態〈脱毛症X〉 c 周期性臍部脱毛症 d パターン脱毛症
6. 腫瘍性皮膚疾患	A 乳頭腫 B 肥満細胞腫 C 扁平上皮癌 D 悪性黒色腫〈メラノーマ〉 E 犬皮膚組織球腫 F リンパ腫 G 皮脂腺腫瘍 H 耳垢腺癌 I 軟部組織肉腫 J 血管肉腫 K 血管腫 L 過誤腫	
7. その他の皮膚疾患	A 瘡瘡 B 光線過敏症 C 熱傷、凍傷	
8. 皮下織の疾患	A 蜂窩織炎 B 褥瘡 C 潰瘍 D 瘻孔	

XV 乳房・乳腺の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 乳房炎	A 伝染性乳房炎 B 環境性乳房炎 C 未経産乳房炎	a 黄色ブドウ球菌 b マイコプラズマ c 無乳性レンサ球菌 a 大腸菌群 b 環境性レンサ球菌 c 環境性ブドウ球菌 d 藻類 e 酵母 f その他 a <i>Trueperella pyogenes</i> b その他
2. 乳房疾患	A 乳房浮腫	
3. 乳質異常	A 血乳症 B 二等乳症	
4. 乳頭疾患	A 乳頭損傷 B 潰瘍性乳頭炎 C 乳頭腫 D 副乳頭	a 乳頭瘻管 b 乳頭管狭窄 c 乳頭括約筋損傷

XVI 新生子の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 胎児期の障害	A 感染症奇形 B 胎子異常 C 胎便吸引症候群 D 先天異常	a 胎内感染（経胎盤） b 分娩時感染（産道通過時） a 臍ヘルニア b 水頭症 c アトレジア d 口蓋裂 e 突球
2. 出生時の疾患	A 新生子仮死 B 臍炎（臍静脈炎・臍動脈炎・尿膜管炎） C 尿膜管開存	
3. 出生後の疾患	A 胎便停滞 B 受動免疫不全 C 新生虚弱子症候群 D 新生子黄疸《馬》 E 生理的貧血《豚》	

XVII行動の疾患

大項目	中項目	小項目
1. 伴侶動物の問題行動	A 攻撃に関連する問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 序列関連性攻撃行動 b 葛藤性攻撃行動 c 自己主張性攻撃行動 d 同種間攻撃行動 e 遊び関連性攻撃行動 f 恐怖性/防御性攻撃行動 g 縄張り性攻撃行動 h 所有性/資源防護性攻撃行動 i 食物関連性攻撃行動 j 転嫁性攻撃行動 k 愛撫誘発性攻撃行動 l 母性攻撃行動 m 疼痛性攻撃行動 n 特発性攻撃行動
	B 恐怖・不安に起因する問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 分離不安 b 恐怖症 c 全般性不安障害
	C その他の問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 過剰発声 b 不適切な場所での排泄 c 関心を求める行動 d 常同障害〈股端舐性皮膚炎、尾追い行動、脇腹吸い行動、心因性脱毛症、毛織物吸い行動、織物摂食行動〉 e 自傷行動 f 多動障害 g 不適切な場所でのひっかき行動 h 高齢性認知機能不全
2. 産業動物と展示動物の問題行動	A 問題行動	<ul style="list-style-type: none"> a 自傷行動 b カニバリズム c 耳齧り、尾齧り d 異物舐め e 蹴癖、咬癖、齧癖、熊癖 f 抜毛症 g 往復歩行